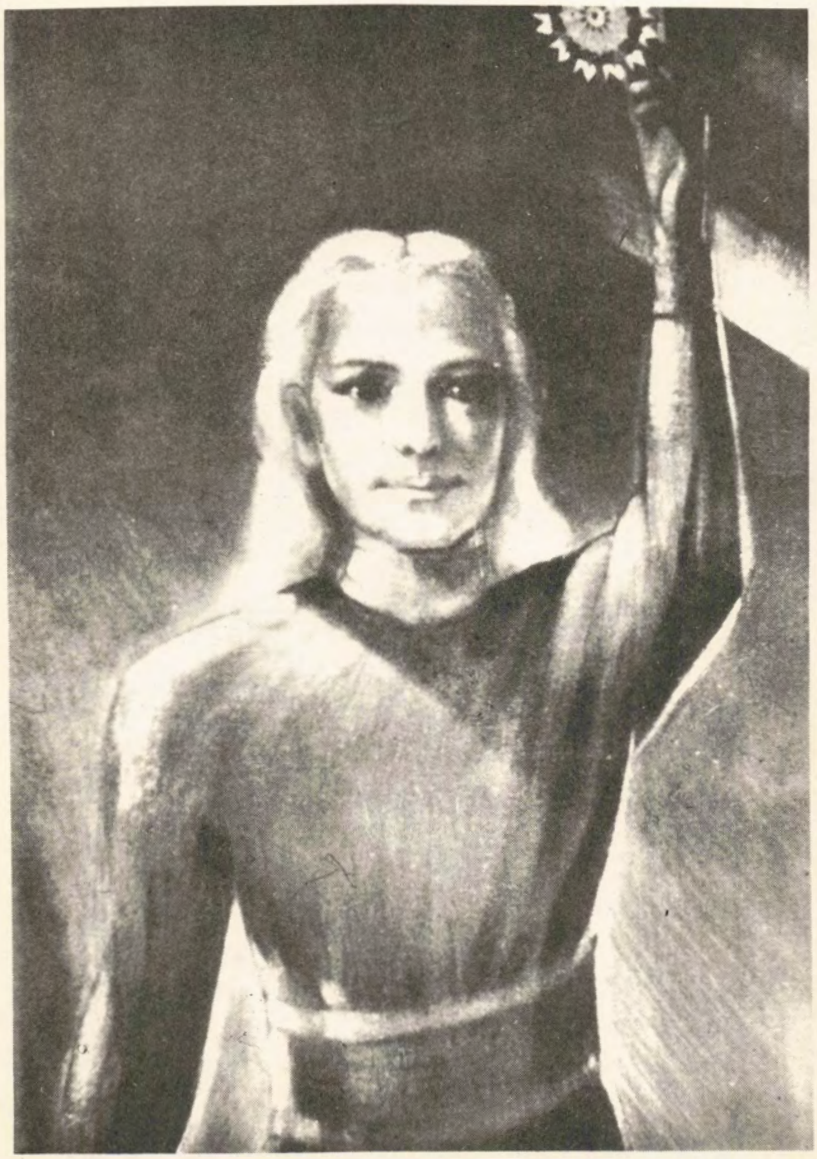
Kosmos 46

IGAP-Japan



☆本誌掲載記事はすべて翻訳
転載権取得済。禁無断転載

Kosmos　第46号目次

なぜ彼らは来るのか（5）・・・・・フレッド・ステックリング　1
マルセル・オム教授の不思議な発見物・・・・・・・・IGAP－J　10
クレメント十五世・・・・・・・・・・・・ハンス・ペテルセン　16
質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
<新訳>空飛ぶ円盤実見記（3）・・G・アダムスキー　20

★ **表紙写真**　一九五二年十一月二十日，ジョージ・アダムスキーがカリフォルニアの砂漠で最初に会った金星人の肖像画．アダムスキーの記憶と，同行したアリス・ウェルズが双眼鏡でながめながら描いたスケッチとに基づいて画家に描かせたもの．写真ではないがホンモノそっくりだといわれている．原画は美しいカラーである．詳細は本号掲載記事「新訳〝空飛ぶ円盤実見記〞」に述べてある．

★ **スペースブラザーズとの挨拶**　この図は宇宙の兄弟愛のシンボルであって，スペースブラザーズとの挨拶の仕方を示したものである．ブラザーズとコンタクトする際は握手ではなくて，このようにテノヒラを接触させるのである．フレッド・ステックリングの証言による．

★ **コズミック・シンボルマーク**　このマークはアダムスキーがブラザーズから伝えられたものである．円の中の左側は「創造的父性原理」をあらわし，右側は「受容的母性原理」をあらわしている．そして全体で宇宙の生命創造を象徴しているのである．このマークを着用していれば，地球または他の惑星の「宇宙の意識」を自覚している人々の注目をあびるであろうという．現在はIGAP（世界GAPの略称）のシンボルマークになっている．

なぜ彼らは来るのか(5)

フレッド・ステックリング

第8章
ヨーロッパ講演旅行

筆者フレッド・ステックリングは米国人で，かつてアダムスキーの弟子であった人。料理専門家として一家をなすかたわらＵＦＯ問題にも深い関心を持ち，アダムスキーの指導のもとに宇宙学を学んだ。しばしばスペースブラザーズとコンタクトしているといわれ，一九六六年秋にヨーロッパへ講演旅行に行った時，ドイツで急行列車の車窓から上空に出現したスペースブラザーズの大母船団を８ミリ映画に撮影して大問題になった。撮影時には数百名の乗客も母船団を目撃した。詳細は本章に述べられている。

わが友ジョージ・アダムスキーから学んだ事柄ばかりでなく、宇宙人がもたらすすばらしい物事をも関心のある人々のすべてに伝えたいという熱烈な願いを私は持っている。宇宙人の生き方の原理や彼らが乗る宇宙船、これまでに行なわれた多くの目撃例等については話さねばならぬ事が沢山ある。

友人たちや私はこれまでに昼夜の両方にわたって何十度も宇宙船（円盤）を目撃した。時折宇宙船は空中高く静止して、日中は真珠のように、夜は燃える火のように見えたりしてから、突然ジグザグに飛んで、次に三六〇度のターンをやり、音もジェットストリームも残さずに数秒で空中へ舞い上がったりする。このすさまじいスピードによって宇宙船はスペクトルのあらゆる色を放つが、夜間は特にそうである。

私たちはあらゆる所で宇宙船を見た。コロラド州デンバーに住んでいた頃、小型円盤群と共に一機の巨大な葉巻型輸送船（母船）を目撃した。ニューヨーク市ではプラザ・ホテルから遠からぬ空に巨大なカラーフルな円盤が停止しているのを見たが、やがてそれは夜空に急上昇して行った。ワシントン市では一九六四年の夏の或る日に六機の円盤が青空に乱舞していた。また同じワシントン市のイレヴンス・アンド・ジー街で一機の円盤がクロースアップで見られたために、詳細な点まではっきりとわかった。これはアダムスキー氏が望遠鏡で撮影したのと全く同じ型の円盤であった。

以上は目撃例の数例にすぎない。他にも沢山見ているが、目撃例を述べるのが本書の目的ではないので省略する。

あと数日すれば私たち一家はヨーロッパ旅行に出かけているだろう。多数の人々の前で講演をすることに最初は少々不安を感じたけれども、すべてうまくゆくことがわかっていた。だれしも時にはこの不安な気持

を持つようなことがあるだろう。大群集に接し慣れている人でさえもそうだろう。私は以前に米国とカナダで多くの人々に講演を行なったことがあるし、ラジオやテレビに出演したこともある。だから幾分かは準備ができていたけれども、やはり少々不安だった。たぶんそれは謙虚さの感じのためだったと思う。というのは〝真相〟に関するメッセージをヨーロッパの多くの人々に伝える特権を与えられようとしていたからである。また私はアダムスキーの協力者たちに会いたいと願っていた。彼らは宇宙人が地球上に存在する事実を広めることによって自国ですぐれた仕事をやっているということだった。その人々とはハンス・ペテルセン少佐（デンマーク空軍）、ロナルド・キャズウェル（英国）、メイ・モルレ夫人（ベルギー）、ネティー・ド・ブリュン・フォン・ド・コップス夫人（オランダ）等である。この人々は今も最善をつくしている。

一九六六年九月三日、私たち—妻と息子と私—はニューヨークからフランクフルト行きの巨大な太西洋横断ジェット機で旅立った。私はこれまでにグライダーを含むあらゆる型の自家用機や商業用ジェット機で何度も空を飛んだことがあるが、このように大きな旅客機—ボーイング七〇七—に乗り込むのはやはり異常な経験であった。まもなく私たちは二マイル近くもある滑走路を走り去って数秒後には夜空に浮かんでいた。一千フィートの安全な高度に上昇する前のこの重大な瞬間に私はいつも人間が大空へ飛び上がろうとした昔の努力を思い出す・・・・「空気より重い物は飛ぶことはできない！」と当時のすぐれた科学者たちが述べた。しかるに百六十名の乗客と六名の乗員が今や時速六百マイルのスピードでヨーロッパを目指して飛んでいるのだ　・・・・列車の三台の客車ほどの長さがあり、十万馬力以上の力を持つファンジェット・エンジンで推進され、燃料タンクは二万三千ガロンの燃料タンクで満ちている。これはすばらしい偉業であって、しかもそれが飛ぶのだ！

わが機は四万フィートの高度でいなずまのように飛行して、米大陸の最後のポイントであるガンダー（ニューファウンドランド島）を通過した。まだ荒涼たる二千五百マイルの太西洋が前方に横たわっている。この時までにはわれわれは落ち着いていたが、私は眠れなかった。フィルムの入ったムービーカメラを持って窓ぎわにすわりながら私は夜空を見つめて円盤がきらめくのを待った。そこらの空中に宇宙人が円盤に乗っているのだという気がした。そしていろいろな想念が心中を通過し、ワシントン空港に二人のブラザー（宇宙人）がいて、顔に微笑を浮かべていたのを思い出したりした。彼らの宇宙船を映画に撮影することが許されるだろうか。二人が見せた微笑には何かの意味があったのだろうか。

するとスチュワーデスがやって来て、毛布がいるか、乗心地はよいかと尋ねたので、ふとわれに返った。

「飛行機に乗るのは好きです」と答えてから私は続けた。「小型飛行機で飛ぶのは私の趣味です」

スチュワーデスは微笑して言った。「私も飛行機に乗るのが好きで、それでスチュワーデスになりました」

彼女は通路を歩いて行った。私は窓の方へ顔を向けて再び見つめた。星々が大空に満ちている。突然、どこからともなく一個の赤色に輝く星のような物体がやって来て、急角度を描きながら接近して来た。距離は私の飛行機から二、三マイルあるだろう。最初その物体は水平に出現して、池に投げられる平たい小石のように波状飛行をやり、次に空中へ急上昇して行った。あっという間の出来事なので映画に撮るのを忘れてしまった。あとで気づいたのだが、撮影したとしても写っていないだろうと思う。この種の写真は物体が停止して強烈に輝きながら近距離に来な

ければフィルムに写らないからだ。この出来事はニューファウンドランドを通過してから二時間後に起こったのである。この時わが機は太西洋上に一千二百マイルも出ていた。「たぶんブラザーズはこの旅行の途中のどこかで白昼に円盤を撮影させてくれるだろう」と私は思った。

私は眠り込んだにちがいない。突然熱いコーヒーの香りを感じて眼覚めたからだ。朝食が運ばれていて、パイロットがロンドン地区上空にいるとアナウンスした。あと一時間で着陸である。子供も起きていて、二人は座席を交換した。子供ははるか下方の雲を見たかったのである。雲は朝の薄い金赤色に染まって実に美しい光景を呈していた。

時刻は米国時間の午前一時頃である。われわれはヨーロッパ時間の午前六時に時計を合わせるようにと申し渡された。これは五時間ほどへらす一つの方法だなと思った。そして一日が長すぎるように思われる時に仕事の途中でこれが起こればよいがと考えた。

いよいよ目的地に着きそうになってからトラブルが起こってきた。大雨となって雲が低く垂れこめて、視界が殆どきかなくなったのだ。それでわが機は三十分間盲目飛行を続けて、鉛のような霧の切れ目を待った。ついに数百フィート下方に森や田園を発見できたが、雨はまだ窓を打っている。機は着陸した。パイロットの腕はすばらしいものである——彼が巨大な機体を滑走路にきわめて静かに降ろしたので、乗客には殆ど接地がわからない。しかもこの悪天候の中で行なわれたのである。

フランクフルトにいた時、われわれはもっと面白い飛行を経験した。目的地へ連絡することになっていた旅客機は、まさにブラッセルへ向かって離陸しようとしていた。これは最初のオフィシャル・ストップであり、そこでメイ・モルレ夫人とその家族に会うことになっていた（注＝メイ・モルレ夫人とその夫君はベルギーGAPリーダー）。われわれは双発のサベナ機に乗り込んで、ブラッセル目指して雨雲の〝スープ〟の中を飛び立った。機体は荒れ狂う空中で多少揺れたので、乗客にとっては心地よくなかったが、内心ではパイロットになっているつもりの私にはとても楽しかった。

安全な飛行の後、空港で友人たちに会ってからメイの家のあるアントワープへ彼らの車で飛ばして行った。ここでわれわれは三日間滞在して講演、座談会、新聞記者とのインタビュー等を行なうことになっている。しかしまず眠る必要があった。米国からヨーロッパへ飛ぶ途中、殆ど一夜を眠らなかったので疲労していたのである。

最初の講演は同夜八時から始めることになっていた。それで睡眠をとるには数時間しかない。だから文字どおりベッドに落ち込んだのである。数時間のかなり深い眠りの後に少々新鮮な気分になって、居間で他の人々と一緒になった。多くの想念や考えが去来し、疑問も解けた。すばらしい人々の面前にいることは実に楽しいことである。その人々とはモルレ一家（モーリス、メイ、二人の息子フィリップとパトリック）、デンマークから来たハンス・ペテルセン、英国のロナルド・キャズウェル、オランダのフォン・ド・コップス夫人である。話し合っているうちに、全員がそれぞれ円盤を目撃していることがわかった。そしてみんなが私の自参した実写映画を見たがっていた。一つはジョージ・アダムスキー撮影のフィルムの一部で、他の一つはマデリン・ロドファー夫人の撮ったフィルムの一部である。

一同は夕食をとることになった。少々早いけれども、最初の聴衆が一時間ばかり早く来ることを見越して、その時刻までに食べ終わっていることを望んだからである。

七時三十分までにはかなり多数の聴衆が来て、リビングルームとダイ

ニングルームのイス席にすわった。全員が極端に興味を持っているらしい。パトリック・モルレがフランス語で紹介の挨拶をやった。私以外にはハンス・ペテルセン少佐とロナルド・キャズウェルが各自の体験を話した。そのあと私の妻のイングリッドが一同に加わって米国上院での体験談を語った。上院へアダムスキーの円盤実写フィルムを持って行ったマデリン・ロドファーに妻が付き添ったことがあるのだ。最後にはコップス夫人がオランダでテレビに出演したことを話した。コップス夫妻はハーグから私に会いに車でやって来たのである。というのはその週末に彼らのグループと合流することになっていたからだ。

この講演会には数名の科学者が出席したが、その他にベルギーの新聞社から二名ほど来ており、この人たちはあとで九月三日と四日に〝ベルギー・ニューズ〟紙に非常にすぐれた記事を書き、また或る週刊誌にも四頁に及ぶ記事を掲載した。講演のあとで多くのディスカションが行なわれた。この三日間のあいだ一時間たりといえども興味を持つ人が全然いない時はなかった。多くの人が真実を求めていることがわかったのである。

われわれを絶えず忙しくさせ続けた催し物や会合等にもかかわらず、アダムスキー協力者一同は早朝まで楽しい討論の時間をすごした。近年になってあらゆる国々の人々が少しでも多くの知識と真相を望んでいることがわかった。

ヨーロッパ中央部の六つの都市で計七回の講演を行なった。もちろん多くの小グループ集会も開いた。アントワープの郊外における三日間はあっという間に過ぎたので、われわれはオランダのデンハーグに向かって出発することにした。出発の前日にアントワープへ短距離旅行をする時間があった。きわめて魅力あるレストラントで昼食をとったあと、観光に出かけて歴史的な建築物の写真を撮った。ベルギーはたいそう清潔なきれいな国で、常緑の地方と全くの平地と多数の樹木がある。人々は花を愛するので、どこへ行っても花が見られる。

われわれのベルギー滞在は終りとなったので、モルレ夫妻、ハンス・ペテルセン、ロナルド・キャズウェルらに別れの言葉を述べた。彼らも自国へ帰るのである。パトリックが車でわれわれをデンハーグへ車で案内し、そこで一夜をすごすことになった。翌日われわれはドイツのマンハイムに行くことになっていた。新聞記者に会ったり或る団体の会合に出席したりするためである。

オランダもベルギーと全く同じであることがわかった。同じような緑の地方、放牧中の家畜、よく管理された野菜畑、非常に清潔な都市等がある。われわれは同夜デンハーグのコップス家の客となった。この家族は決して忘れることのできない誠実な人たちである！

デンハーグのグループはすばらしかった。メンバーたちは円盤の目撃よりもスペース・ブラザーズがもたらした知識や生命の原理の方にはるかに関心を持っているようだった。彼らはGAPリーダーたちによって行なわれたすぐれた活動によって〝なぜ彼らは来るのか〟のポイントの殆どをよく知っていた。一同は生命の〝より深遠な物事〟、人間の本源、いわゆる〝魂〟の位置、種子の正しい概念と成長後の正しい注意法等に関して有益なディスカションを行なった。これは両者にとってすばらしい体験となった。ここで私は言いたい。人間は一つの魂を持っているのではなくて〝生きて働いている魂そのもの〟であると。

数時間の睡眠の後コップス夫妻がアントワープへ車で送り返してくれたので、そこでわれわれはモルレ夫妻に再会した。今度は夫妻が車で空港へ送ってくれたので、そこでフランクフルト行きの飛行機に乗ってマ

ンハイムへ行くことになった。全員に別れの言葉を告げて再会を約した。

われわれは双発の旅客機に乗り込んで、フランクフルトへ向かって二時間の飛行を行なうためにベルギーを出発した。今度は天気は快晴である。散乱した厚い積雲が大きな山脈のように青空にかかっているなかをわれわれは飛んで行った。またも私は円盤を探し続けるのに忙しかった。まだその時期ではないと感じたのだが——。一度、真黒に近い長い物体が雲間に垂直に浮かんでいるのを見た。たぶん飛行機から五マイル離れていただろう。それは全く巨大な物体で、五秒後に消えた。もちろんカメラを取り出すひまはない。「そうだ。また別な時に現われるだろう」と私は思った。

われわれはフランクフルトへ早目に着いた。これは旅客機を東方へ押した逆風のためである。

フランクフルトの主空港は各国から来た旅客機類の充満した巨大な施設である。「なんというものすごい輸送状態か！」と思った。管制塔の係員は毎日ずいぶん多忙な仕事をやっているにちがいない。なんと重い責任を負っていることか！」

空港の快適な連続往復バスがわれわれを三十分以内にフランクフルトの下町地域へ運んだ。このバスは殆どガラスで覆われている。われわれはちょうど間に合った。というのは列車がマンハイムに向けて十二時までに出発することになっていたからだ。ドイツの輸送機関はきわめて優秀で能率よく、時間どおりに正確に走る。これは米国でもまねしようとしたが、だめだった。しかし米国では私用の自動車を持つ人が多いので、米国人はさほど公共輸送機関に頼る必要はない。だがもし米国にこのような列車があれば私は喜んで時々車をやめて、車のトラブルを解消したいところだ。

シフェルシュタット・マンハイムの人々は円盤問題についてたいそう興味を持っているようだが、やや迷っているようでもあった。講演会に出席した人々は教師、新聞記者、技術マン等で、みな熱心に聴いてくれた。彼らは私のフィルムをきわめて注意深く吟味し、それがホンモノであることを認めた。

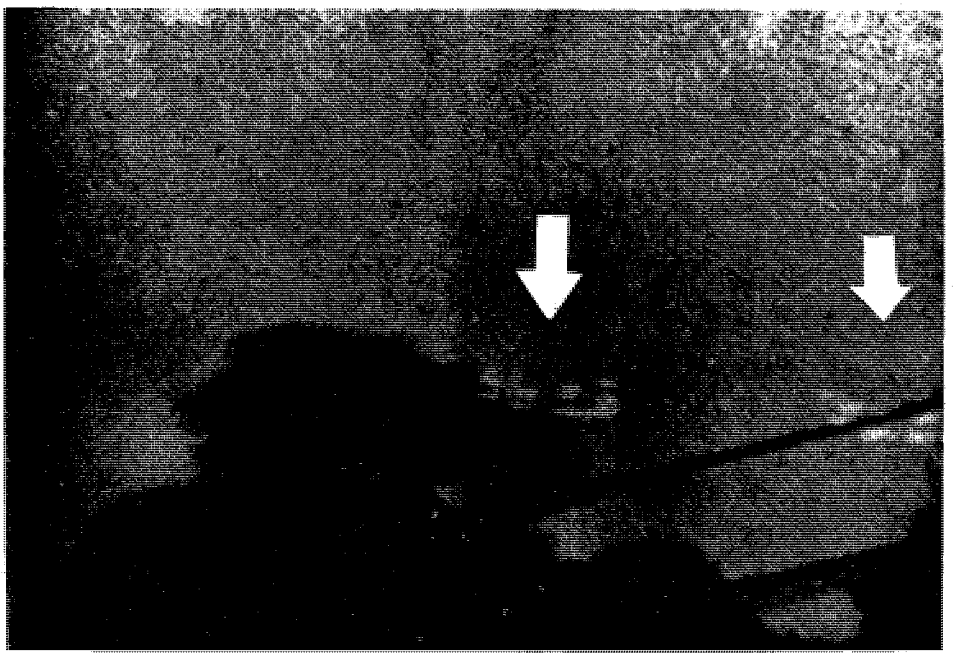
翌朝われわれは再びフランクフルト行きの列車に乗り込んだ。そしてフランクフルトからウィーン行きの飛行機に乗った。オーストリーのGAPリーダーであるドラ・バウアー夫人がしきりにわれわれを待っていたのである。ぎっしりつまったスケジュールと家庭での雑事のために、講演はいわばぎりぎりに準備されていた。われわれはW氏に別れを告げて、連絡し続けることを約束した。

急行列車がドイツの田舎を走っているあいだ、われわれの思いはすでにウィーンに飛んでいた。今朝私は非常に警戒的になって、しばしば青空をのぞき込んでは円盤の出現を待った。私は自分のキャビン・コンパートメントを離れて列車のホール内の窓を開いた。息子のグレンもそばへやって来た。樹木や電線があとへと飛び過ぎる緑の田舎の風景を二人が見つめていた時、突然十二機の葉巻型の白っぽい編隊が推定四万フィート以上の高度にいるのに気づいた。二人はこの驚くべき光景を見つめたが、突如これと同じような編隊が前方に出現して、全部で二十四機となった。私はキャビンへ飛んで帰り、カメラ（レバー8ミリ撮影機。パワーズーム付き）を持って撮影を開始した。この時までにはこの白い葉巻型宇宙船団が更に二個編隊ふえていて、今や総計四十八機の船団となっていた！ イオン化空気のフォースフィールドに取り巻かれたこの四十八機の母船群（輸送船群）が、あたかも水中のイルカの群れのように遊弋（ゆうよく）しているのだ！ 驚くべき大宇宙船団！ 信じられないようなこと

だが事実なのだ！ 私の知る限りではかつてこれほどの宇宙船団を映画に撮影した人はいない。また、私はあまりに驚くべき光景を撮影しつつあるので、多くの人がこのフィルムに手をふれて吟味したがるだろうと思った。「このフィルムは極端に慎重に取り扱わねばならない」と考えた。そうするうちに二個編隊が他の編隊から離れて、ややこちらへ接近して来た。私は撮影し続けた。ただし時折樹木や電線がこのすばらしい宇宙船団の光景の中へ入って来る。この映画は大気圏外の隣人たちの来訪が事実であることを多くの疑う人に対して証拠立てることになるだろうとも思った。というのは、フィルムには全く事実そのものが写ったし、8ミリの家庭用映画フィルムに絶対にインチキのできない物が写っているからである。

妻もこの光景を見ていた。そして列車に乗っていた多数の乗客も目撃していて、妻はこの人たちと一緒に物体の数をかぞえていた。なんという驚嘆すべき光景か！ われわれも他のだれもかつてこんな光景を見たことはない。目撃していた他の乗客たちの顔には不思議そうな表情があったが、だれ一人として恐れる者はなかった。少なくとも私の知る限りでは、かつてドイツ上空にこれほど多くの宇宙船が見られたことはない。その時刻は一九六六年九月七日の朝十一時四十五分であり、場所はマンハイムとフランクフルト間の地域である。大船団はどこからともなく出現して、三分間少々の間すばらしい〝ショー〟を見せてから、どこへともなく消えて行った。私はこの宇宙船団を二十三フィートの8ミリコダック・カラーフィルムに撮る特権を与えられたのだ！ この絶好のチャンスを私に与えてくれたことに対して隣星の友人たちに心から感謝するものである。

現在までに米国で実に多数の人がこの映画を見たが、そのなかには新



ステックリングが列車中から撮影した8ミリ映画の1コマ。矢印は船団を示す。

聞記者たちもいて絶賛の記事を書いてくれた。

私はカメラに残っていたフィルムを全部使い果たした。そして自分のやった事に心から満足した。妻があとで次のように語った。「あの船団を見た時、髪の毛が逆立ちするような気がしたわ！」これはまさに私も感じたことである。

そうこうするうちにわれわれはフランクフルト・ユニオン駅へ到着した。それから空港へ行き、やがて待機している旅客機に乗り込んだ。二十分後には出発することになっている。またもわれわれは時間に間に合うようにうまくやったのである。ことわざで言っているように間一髪の成功だった。

われわれはウィーン行きの昼食飛行を行なった。スチュワーデスが食事を出したあと、イスの背にもたれてオーストリーの新聞を調べてみた。結局われわれはオーストリーで起ころうとしている物事について今日まで積極的である必要があったのだ。旅客機がアルプスから約二十マイルの所にさしかかった時、少し左へターンしてオーストリー寄りの山脈に沿って進行し、リンツの町の上空を飛んだ。この町ではウィーンの講演のあとで別な講演を行なうことになっている。

着陸も天候もすばらしかった。バウアー夫人と若い男（医学生）が迎えに出ていた。

ここでもわれわれは税関の役人たちの迅速丁寧な取扱いを受けた。そして二、三分以内には空港からウィーン下町行きの往復バスに乗っていた。今度は下宿に滞在することになった。というのはウィーン産業博覧会のためにホテルはみな満員だからだ。

少憩の後に紹介のための小会合が開かれた。バウアー夫人と一緒に講演会を企画して何かと重要な役割を果たしたり、あちこち奔走しては講演会を準備してくれた別な若者のS君は二、三の下調べを望んだ。会場の下見等である。これは翌日一同でやった。

ドラ・バウアー夫人は実にすてきなまじめな女性で、宇宙からの訪問者に関する事実を伝えるためにドイツ語圏諸国で活動を続けている。彼女が出しているUFOニューズレターはドイツやスイスで有名である。ヨーロッパの他のGAPリーダーたちと同様に、一九五八年と一九六三年にアダムスキー氏がヨーロッパへ講演旅行に行った時、バウアー夫人も個人的にアダムスキーに会っている。そのドラ・バウアーと会って多くの意見を交換するのはうれしいことだった。このウィーンでは初めて小休止が訪れた。講演は二日後に開催される予定だったので、市の内外を少し見学することができた。ウィーンの郊外は実に美しい。都市部には少しがっかりした。これはおそらく非常に古い伝統的な建物と狭い街路や小道等のためである。ものすごく混雑した交通のために何時間もタクシーに乗ってすわっていることは全く困難であった。

大講演会は成功だった。数百名の人が来場した。ラジオ・テレビ等に出演したいという私の願いは不可能のようだった。そこのあらゆる放送局は国営であるからだ。講演終了後に多数の人がステージへやって来て質問したが、特に若い人が多く、彼らはきわめて心の広い人たちだった。私はその夜数百の質問に答えねばならなかった。そして本書を書くようになった時はその質問の内のいくらかを含めることにした（注＝本編の第一〇章〝質疑応答〟に加えてある）。

翌日、急行列車でウィーンの西方二百キロの所にあるリンツへ行った。この地域でもわれわれは世話のゆきとどいた起伏した農場地帯と、小さいけれども非常に美しい村々を通過した。三時間半後にリンツへ着いてK氏に迎えられた。氏は現在リンツUFO研究グループのリーダーであ

る。氏の宅で昼食の後、われわれは多くのUFOコンタクティーについて話し合ったが、ここでもわれわれは、殆どの証拠はすでにアダムスキー氏によってもたらされたという決定的な結論に達したのである。というのは氏はカリフォルニア州デザートセンターの一九五二年十一月二十日の記念すべきコンタクトに六人の目撃証人を得たばかりではなく、その後の宇宙船内の氏の体験や大気圏外の諸状態に関する報告類は、宇宙飛行士やロケット類、特にサーベヤー一号とルナオービター二号等によって確証されたからである。その確証は氏の著書〝空飛ぶ円盤同乗記〟が一九五五年に出版されてから七年ないし十二年後に現われたのである。

さてリンツの下町地区の講演会場へ向かって出発する時が来た。一同が驚いたことにはここでも多数の聴衆が参集した。K氏はこんなに集まるとは全然予想していなかった。なぜなら氏の説明によればまだ休暇期間中で多くの人が市外へ出ていたからだという。それにもかかわらず会場は満員で、みな真剣だった。そしてこれまでの各地における講演と同様に、多数の関心の深い人々がまたも講演後に居残って質問を続けたのである。深い興味を示したのは技師や医師その他多くの人々で、みなUFO問題についてよく知っていることがわかった。この会場には小さな食堂が付属していたので、そこでわれわれは深夜まで話し合ってやっと別れたのである。

翌朝われわれはウィーンへ帰った。バウアー夫人は再度話し合うためにわれわれに同行した。一同は空港へ行った。一時間後に旅客機がミューニッヒに向かって出発することになっていたからだ。ミューニッヒでは山岳地帯を三日間観光旅行することになっている。ついに出発の時が来た。別れの言葉を交してからわれわれは旅客機に乗り込んだ。そして一時間後にはミューニッヒに着陸した。空中を飛んでいたあいだに再び宇宙船を探して空を見つめたけれども何も出現しなかった。しかし私は未現像のフィルムに撮影した宇宙船で全く満足していた。

ババリア・アルプスの三日間は、すでに過去の訪問で美しい風景を知っていたとはいえ、忘れがたいものであった。フェッセンの城やガルミッシュ・パルテンキルヒェンの優雅な山々は訪れる人にとって忘れることはできないだろう。ババリアのような美しい場所を訪れるのに三日間は不充分である。ここはややコロラド州デンバー付近のロッキー山脈に比較できる。デンバーには一九六〇年代の始めの二年間住んでいた。しかしババリアの方が風景全体がもっと新鮮でもっと緑に溢れている。これはこの地方の気候が常に湿潤でよく雨が降るからで、メキシコ湾流の影響を多く受けているのである。

ミューニッヒからはきれいなカラベル・ジェット機が西ベルリンへわれわれを運んだ。ベルリンでは小講演が開かれることになっていた。飛行は始めは快適に思われたが、後にひどく揺れ出した。この不快な状態はドイツの東部上空を少なくとも一五〇マイル続いた。条件が悪いためにかなり低空で飛ばねばならず、しかも悪いことには厚い雨雲と雷雨の中を突き抜けたが、ベルリンに無事着陸した。

ベルリンは超モダンな非常に清潔な都市で、たしかにすぐれた建築の好見本都市である。市民はきわめて友好的で服装も立派であり、政治を始めとして世界のあらゆる出来事にみな極端な興味を持っている。

二つの小講演会は完全な成功だった。そして市内と周辺の二、三の観光旅行の後、再びワシントン市へ向かって離陸することになった。われわれはまず七二七ジェット機に乗り、それによってフランクフルトへ引き返して、そこから七〇七ボーイング・ジェットが北大西洋を越えて長距離のノンストップ飛行に飛び立つのである。この巨大なジェット機に

乗っているあいだ或る新聞が私の注意を引いた。その大見出しは次のとおりである。

「一個の巨大な輝く物体が推定六〇マイルの高度でドイツのルール地方の上空に出現して昨日官憲を狼狽させた」

これは大気圏外から来た訪問者かもしれないと一人のレーダー手が述べている。他の人たちはこれを大気球だと片づけたがっているが、もちろんこれは、物体を写真に撮影した地方の一天文台によって誤りであることが証明された。一体六〇マイルの高度に気球が上昇するだろうか？その写真にはイオン化空気のフォースフィールドに包まれた二機の大母船が写っているのである。その宇宙船は空中に停止していて、私が撮影した8ミリフィルムの現像後に出現した母船群に酷似していた。六〇マイルの高空ともなれば地球の大気の密度は殆どゼロに等しくなるけれども、一度低空でフォースフィールドに包まれた宇宙船は、宇宙空間にいてもこの保護層すなわちイオン化空気の〝防禦壁〟を保ち続けるのである。そして宇宙空間に出てしまえばこの〝防禦壁〟は船体を取り巻く人工大気層のような状態になる。或る放射フォースがこのフォースフィールドの中へ放たれていて、しばしば時速数百万マイルのものすごいスピードで宇宙空間を稲妻のように飛ぶ惑星間航行中にイン石との衝突を防ぐし、また飛行中は宇宙空間の自然の流れである電磁エネルギーを利用するのである。さきほどの新聞記事は、私があの大船団を映画に撮ってから二週間後もまだあの美しい宇宙船がドイツ上空に滞在していることを立証したことになる。

旅客機による帰りの飛行中に、私は運よくまたもや一機の葉巻型物体を数フィートのカラー8ミリフィルムに収めることができた。この物体は旅客機の下方にいて、二機の白色の円盤を従えていた。今度のわれわれの位置はニューファウンドランドから三十分を要する約三百マイルの所で、三万二千フィートの高度であった。後になってわかったのだが、この潜水艦型宇宙船は一万五千ないし二万フィート下方を非常にゆっくりと飛んでおり、海中へ突込む目的で鼻先を下方へ向けていた。その色は茶灰色で、大きさは私が見た限りでは長さ約三百フィートである。フォースフィールドは部分的に伴っていないようであった。というのは船体の輝きが見えなかったからである。一方、二機の円盤は非常な白色で、フォースフィールドを放射しているために、母船から二百フィート離れていても識別できた。

私は旅客機の翼のために物体群の目撃ができなくなるまで約三フィートのフィルムを撮った。翼の反対側から再びそれらが現われるのを待ったが、見えなくなっていたあいだに消えてしまったらしい。どこにもその姿がなかったからだ。

米国の東海岸上空にはまたも大雨が降っていた。このため着陸の許可が出るまでに一時間の旋回をして待たねばならなかった。ここでもパイロットが巨大な機体をケネディー国際空港の雨に濡れた滑走路へ柔らかく着陸させた時に抜群の腕前を発揮したのである。外は暗く、大雨は最後の接地の際に機体を激しく打っていた。視界は一マイルに落ちていた。乗客の緊張はやわらいで、あちこちで乗員に対する拍手が聞かれた。

疲れたけれども楽しい旅だった。われわれは最善を尽くして努力した。妻のイングリッドも講演を行なった。彼女は全力をあげてそれをやった。なぜなら妻も立派な哲学者であり、宇宙の真理の支持者であるからである。彼女もこの世界の文明の改善の方向にその努めを果たしているのである。

（第八章終り。以下次号）

マルセル・オム教授の不思議な発見物

IGAP＝J

先号の質疑応答欄で、オム教授がペドラ・ヒンターダで発見した古代の不可思議な紋様について発表せよとの読者のご質問に対して、資料入手次第に掲載しようとお答えしたが、その後早川書房の〝SFマガジン〟編集長森優氏（南山宏のペンネームで少年雑誌に不思議な物語を執筆される方）よりオム教授の著書 The Sons of the Sun（太陽の子ら）を拝借することができた上、本会幹部の安斎純夫君が数年前にオランダGAPリーダーであったレイ・ダクィラ女史が各国に頒布していたUFOスライドの内、このオム教授の発見物を主体にした〝円盤の今昔〟と題する一組を取り寄せて秘蔵していたことが判明したので、それらを参考にしてここにその概略を紹介することにした。前記オム教授の著書はまだ邦訳版が出ていないので、この記事は読者にとって価値ある資料になるだろう。もっともオム教授の発見物についてはかなり以前に本会発行の機関誌ニューズレターに紹介したことがあるが、それはきわめて簡単なものであった。今回は写真や図版等を挿入して、教授の驚くべき発見が重要な意義を持つことを強調したいと思う。貴重な資料を提供された森氏と安斎君に深甚の謝意を表する次第である。

マルセル・オム教授

オム教授の名が円盤研究界に急速に浮かび上がってきたのは、教授が円盤に関心を持つようになったからではなく、ブラジルの秘境を探険した際にアダムスキー問題と重大な関係のある不思議な古代の文字と図形を発見したからである。この事件はかつてフライング・ソーサー・レ

ビュー誌にも報導されたし、各国の円盤研究界でも話題となったが、米国GAPはあまり取り上げていなかった。しかし一万数千年をへだてて同じような紋様が存在したという事実は、アダムスキーの体験の真実性を裏付ける有力な証拠となるので見のがすわけにはゆかない。

オム教授は一八九七年にフランスで生まれた。アルジェリア北部のアルジェ大学で考古学を学んだあと、母校でアラビア古典を教えていたが、その後ブラジルへ渡ってサンパウロに居住するかたわら各種の科学団体のメンバーとなり、同市の〃アメリカ人博物館〃の館長となっている。その前にはアフリカ大陸で十五年間をすごして、地中海沿岸諸国の古代の遺跡を調査した。

また教授はピグミー族も研究し、サハラ砂漠の有名な岩石彫刻紋様等も研究した。一九四〇年にはアメリカ、ハイチ、ベネズエラ経由でブラジルへ行き、ついにそこへ落ち着いて、南米の考古学センターからアマゾン河流域の広大な地域を探険するように命ぜられた。そこで彼の輝かしい探険家としての一大業績が打ち立てられることになる。実際彼はブラジルの大未開地の神秘的な古代の遺物を組織的に発見調査した最初の科学者であるが、彼自身はこのブラジル北部一帯を、一万数千年前に海中に没した失われた大陸〃アトランティス〃の一部であると確信していたのである！

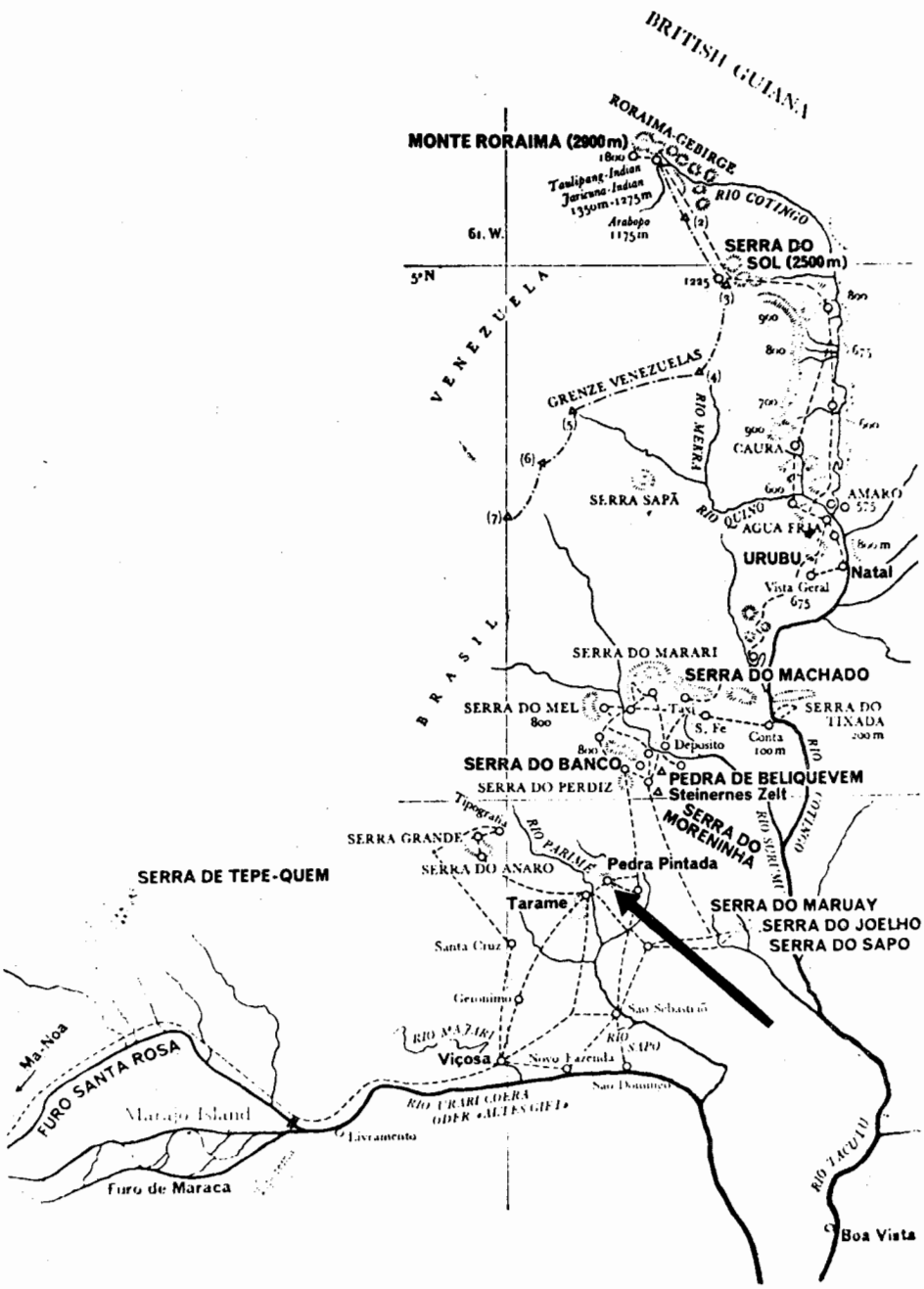
さて彼の探険行に移ることにしよう。一九四九年の秋、オム教授は夫人、愛犬の〃マルアイ〃その他数名の従者とパーティーを組んでブラジル北地を目指して探険に出た。もちろんこれが最初ではなく、この他にもアマゾン河流域一帯を踏査しているが、これはそのなかの一部分である。場所はブラジルの最北端、ベネズエラと英領ギアナとの国境地帯で、人跡未踏の秘境である。

大体一口にブラジルといっても非常に広大な国土であって、人跡未踏地は至る所に存在する。教授一行の前進路には多大の困難と危険が待ちかまえていたが、愛犬のマルアイが再三教授を危機から救出して事なきを得るということがあった。目的地はブラジル北部の奥地とはいうものの、直線距離でいえば北方の英領ギアナの海岸町ジョージタウンから五百キロばかりの、大アマゾンの支流であるブランコ川の上流のゴチンゴ川流域地帯である。このあたりは一帯に平野であるが、北側にベネズエラからギアナにかけてパカライマ山岳地帯が巨大な壁をなしていて、北側からの侵入は容易ではない。次頁の図でわかるように、北端のゴチンゴ川流域にはセルラ・ド・ソル山（太陽の山の意）が二千五百メートルもあり、その他千メートル級の山が沢山あるからギアナ側からは簡単に入れないだろう。図中、点線で教授一行の探険ルートが示してある。

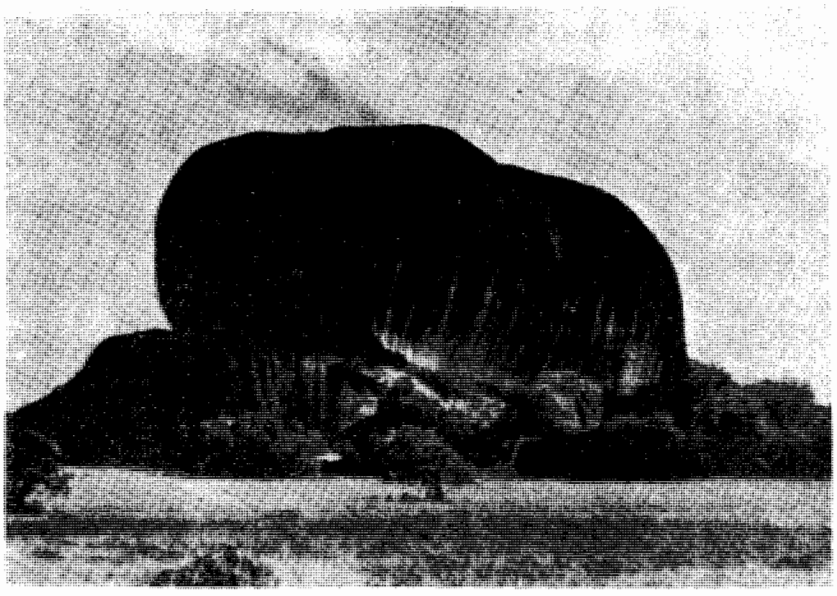
ペドラ・ピンターダ

一行がタラメという所へ来た時、その付近に〃ペドラ・ピンターダ〃という巨大な一つ岩があるのを発見した。ペドラ・ピンターダとはポルトガル語であって「色を塗った岩」の意味である。その名の示すとおり、この岩には赤い塗料を塗ったドルメンがあちこちに付属している。岩の高さは三十メートル、長さ百メートル、奥行き八十メートルの花崗岩で、太古の文明の印象的な遺跡として広漠たる平野の中にそびえ立っている。岩の表面には六百平方メートルにわたって奇妙な紋様や図形が刻まれているが、まだ解読されてはいない。岩全体が人間の頭がい骨のような形をした大タマゴ型である。オム教授自身はこれを「アトランティス文明

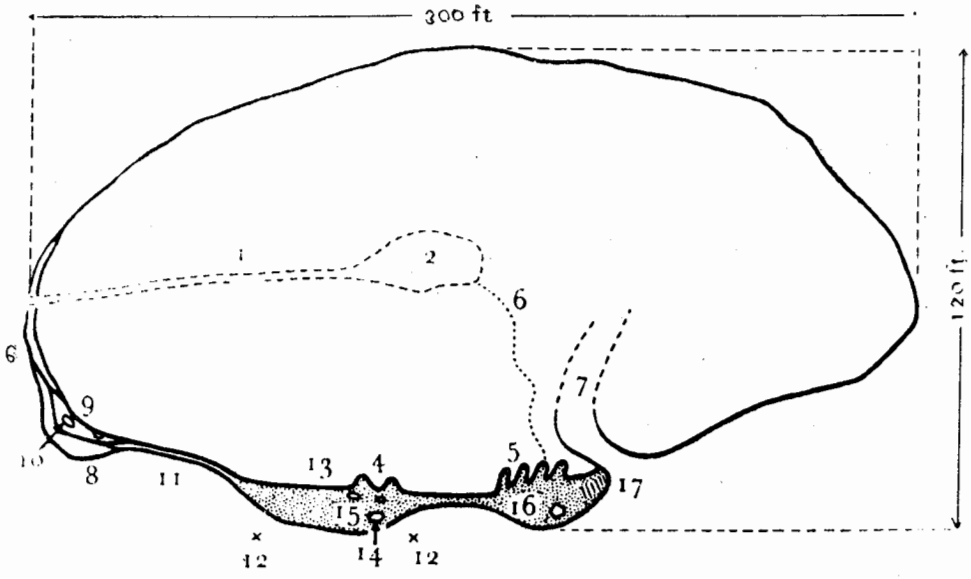
オム教授の探険地帯図。矢印はペドラ・ピンターダを示す。



ペドラ・ピンターダの全景



平　面　図



の石の書物」と呼んでいる。すなわちこれは失われた大陸アトランティスの巨石文化の遺跡の一部であって、現在の文明とは全く関係のない物であると教授は考えているのである。

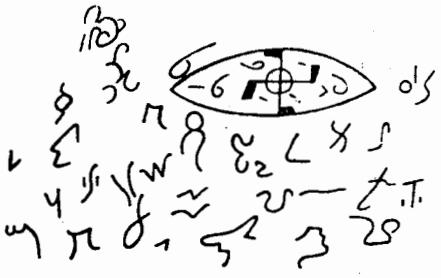
このペドラ・ピンターダへ来た時、豪雨に見舞われて一行は岩の内部へ入り込んでここで一夜を明かすことにした。一同が通路を通っているうちに偶然発見したのが〝埋葬の洞窟〟と〝骸骨の洞窟〟である。この後者においては多数の人骨が発見された。ここで人骨と共に夜を明かしたのだが、身を横たえている教授の眼前に多数の亡霊が出現して〝血のいけにえの踊り〟を演じたという。まことに恐怖すべき一夜であったと教授は述べている。

岩の内部の探険は興味深く、あちこちに小洞穴群や赤い色を塗ったドルメン（二、三個の石の脚の上に平たい石を載せたもの）があり、儀式に使用したと思われるプラットフォームも数個所あった。明らかに太古の文明の人間が聖なる場所とした形跡が残っている。

古代の金星文字か

さて、マルセル・オム教授のこの探険行における最重要な発見物はこのペドラ・ピンターダそのものではなく、ペドラのすぐ隣りにあった小さな奇妙な紋様である。これは或る石器に刻まれていたもので、多年風雨にさらされてかなり摩滅していたために教授はさほど気にとめなかったが、一応参考資料として写し取ったのである。しかし後になってオム教授みずからアダムスキーの最初の著書〝空飛ぶ円盤実見記〟を読んだ時、飛び上がらんばかりに驚いた。なんとそこには教授が持ち帰った紋様と殆ど同じ種類の紋様と図形が金星人から与えられたものとして掲げられていたからである。この点について教授は「私はアダムスキーの書物を読むまでは、あの紋様について殆ど関心はなかった」と述懐している。アダムスキーが〝空飛ぶ円盤実見記〟を出したのはオム教授が〝太陽の子ら〟を出す前であったから、アダムスキーがオム教授の発見を知るわけはない。第一、両者共互いに未知の人で、事前に連絡が行なわれた事実はないのである。これはアダムスキーの金星人メッセージが事実であったことを立証する重要な傍証であって、しかも「いずれ地球の土中からこれと同じような紋様の発見が報告されるだろう」と語った金星人の言葉を裏付けることにもなる。そして一万四千年の太古にも別な惑星の人間がこの地球に来ていた事実を証拠立てることになるのである！

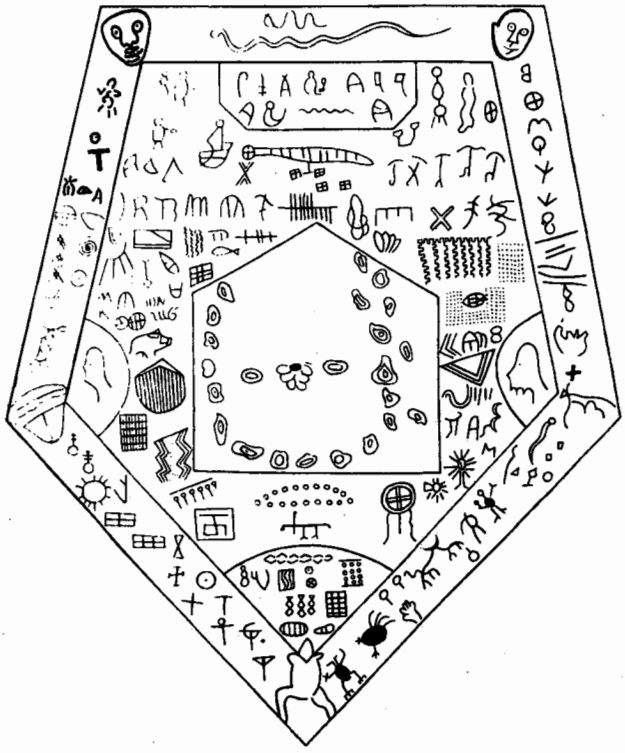
オム教授の発見紋様



アダムスキーが金星人からフィルム上に記されたメッセージを受け取った模様については本誌に連載中の新訳〝空飛ぶ円盤実見記〟に正確な訳を載せるので、併読されたい。オム教授の紋様とアダムスキーのそれとは象形文字（らしきもの）が完全に同一ではないが、レンズの断面図状の図形とその中に描かれているスワスティカ（まんじ）は、フリーハンドで描かれているために多少のゆがみはあるにせよ、同一である。しかも両方共スワスティカの中心部に小円が画かれている。

前述のとおりこの事件は円盤研究界で大問題となった。そして疑う人のなかには、アダムスキーとオム教授がグルになって打った芝居であると言って非難する人もいた。これに対してはアダムスキーもオム教授も全く何の反論もしていない。ただ教授の方が積極的にアダムスキーの体験の真実性を支持しているだけである。そのことは過去のフライイング・ソーサー・レビュー誌に大々的に掲載されたのであるが、編者はその掲載号を失ってしまい、そのためにオム教授に関しては今まで紹介ができなかったのである。

オム教授によると太古において空を飛ぶ機械を用いていた偉大な文明がこの地球上に存在したという。「ジャイアント・バード（巨大な鳥）を持つ人々がこの地上に存在した時代があった。その巨大なシンボルは今なおペルーやアンデスの高地に刻まれていて、翼の両端間の距離が百五十メートルに達するのがある。これは非常な高空からでないと見られない。平たい地面または岩に刻まれたこのシンボル類は、宇宙旅行や空中戦をやった人々のシンボルとみなしてよいだろう。私は大西洋沿岸の国々の口碑伝説や伝承詩などを研究した。またペルシャ人、インド人、メキシコ人、ペルー人のそれらも研究したが、すべて〝ジャイアント・バード〟の伝説が確実に残っていて、それらは空中で火を噴いて大地を破壊しながら絶滅してしまった」と教授は述べている。



ペドラ・ピンタータに刻まれた奇妙な図形

クレメント十五世 (1)

ハンス・ペテルセン

フランスに一奇人あり、その名をクレメント十五世という。実の名はミシェル・コランなるも、われこそローマ法王の正統継承者なりと称してクレメント十五世を名乗る。当然のことながらローマカトリック側からは相手にされず、〝変人〟〝狂人〟等のそしりをまのがれ得ない。上智大学系のローマ法王研究家たる某外人神父の説明によると「アレワタイシタモノデワ　ナイデス」とのことであった。

しかるにデンマークGAPリーダーたるわが友ハンス・ペテルセン空軍少佐からの情報によると、たいした者ではないどころか、彼クレメント十五世こそ実はひそかにブラザーズとコンタクトしている重要な人物であり、スペースブラザーズの情報の伝え手として注目に価するが、本人は宗教でカムフラージュしているのだという。それに関するハンスからの最初の情報は一九七一年二月二十八日付で、各国GAPリーダー宛の公開書簡の形式でもって、春は名のみの風寒き日にわが机上に舞い落ちて来たのであった。この種の情報には免疫になっている編者は巧みな英文で書かれているこの情報文を一読するや格別驚くこともなく、静かにそれを机上に置いたのであるが、少々気になる所もあってただちに英文タイプライターを操作して気ぜわしく質問状を作成して発送した。するとハンスはまたも各国GAPリーダー宛の公開書簡（これをわれわれはコーワーカーレターと称している。同一内容のコピーを十数名のリーダーだけに送るのである—編者）でもって事の重大性を熱っぽく強調し、疑問があれば十五世へ直接に照会せよという。しかも書簡にはクレメント十五世と新聞記者団が数年前にインタビューした際の談話録も添付してあって、その内容は一読の価値を有すると思われるので、この際ハンスの最初のコーワーカーレターから公開することにした。内容に関する判断は読者におまかせする。（編者）

〈一九七一年二月二十八日付でハンス・ペテルセンが各国GAPリーダーに送った公開書簡〉

一九七〇年度にみなさんからいただいた資料・情報類に対してお礼を申し上げます。われらの友である日本の久保田八郎は、先般各国GAPリーダー宛に送った彼の公開書簡において「今や世界の円盤問題に対する一般人の関心は低下してしまった」と述べておりますが、デンマークに関する限りこれは事実に反すると申しておきましょう。

このスカンディナビヤにおいては、円盤問題に対する一般人の関心は一九五七年にデンマークGAPを創立した当時と変わりません。

たとえばGAP講演会を行なえば、時には数百名の聴衆が出席しますし、私や幹部たちは年間五十回以上の講演を行ないますが、一回につき平均百名の聴衆が集まります。

レイフ（ハンスの片腕）が発行しているデンマーク語版〝UFOコンタクト〟は約一千部配布されており、トール・レイフが発行しているスエーデン語版GAP機関誌〝コズミック・ブレティン〟も約一千部出されています。

デンマークGAPの幹部や私は一九七〇年度中に新聞、雑誌、ラジオ等に対して十回以上もインタビューしました。また年間にスカンディナビヤ及び海外の関心ある人から数千の機関誌注文を受けています。

〈以下は同書簡中で特に編者に宛てた部分である〉

久保田よ

君が述べている例のフィルムのコピーが買えるだろうか？　できるだけ早く知らせてくれたまえ。ところで私はカナダにいる君の友に（宮内君のことか？—編者）手紙を出して、私が所有している或る色彩画について知らせてやった。その絵（複数）というのは宇宙のシンボルを表わした金星の絵画であって、実に美しいものだ。それはジョージ・アダムスキーから私に与えられたもので、私はそのコピーを持っている世界で唯一の人間である。その原画がどこにあるかは知らない。アリスが所有しているのではなかろうか。そのシンボルは或る非常に特殊な物事のために用いられるものであるとアダムスキーは言ったが、君の例の友人も何か特殊なインスピレーションをキャッチするのにその絵に興味を持つのではないかと思う。

清家氏に関しては次のように言いたい。（以下は決して清家氏をけなした文章ではなく、むしろこの世界が改善されぬ限り、すぐれた発明も生かされないという意味の意見である—編者）われわれは次の事を思い出さねばならぬ。すなわち米国のオティス・T・カー、南アフリカのバシル・バン・デン・バーグ、オランダのホランダー、英国のサール（以上は重力遮断の方法によって浮上する宇宙船の開発研究家。この内バン・デン・バーグとホランダーはアダムスキーの金星文字を解読して非常に特殊なエンジンを開発した—編者）その他数名の人々の活動は一般には知られていないが、われわれは知っているし、そのいずれも成功しているばかりか、なかには未だに同じ原理で飛ばそうとして研究している人がいるにもかかわらず、そのどれも〝飛ぶ機械〟をコントロールすることができなかった。飛ばせるや否や空中へ消えてしまって帰って来なかったのだ。

このことはこの世界の現状に関するよき示唆を与えるものである。遠い過去において地球人は宇宙船を持っていたと思われるが、その建造や

コントロールの方法を理解する能力は失ってしまった。これは他の惑星から来た人間を攻撃したか、あるいは別な惑星そのものを攻撃した結果であるかもしれない。これについてはクレメント十五世とのインタビュー記事（次号に掲載予定—編者）を読んでくれたまえ。

そういうわけだから聖書に述べてあるように、或る真実の予言類にあるように、そしてブラザーズが真実のコンタクティーたちに語ったように、来たるべき〝宇宙的大改革〟が起こるまでは、この地球上のだれも宇宙的原理に基づいて作られた地球製宇宙船をコントロールすることはできないのだ。不幸にしてこの〝大改革〟は現時代に関する予言に適合するようにこの地球上に生まれてきた数千万のネガティヴな（否定的、消極的）人々の死をもたらすかもしれない。この人々は真実が近づくのを回避しているが、われわれはゆっくりと宇宙的な友好状態に近づいているのである。

こうして清家氏やその他の宇宙機開発研究活動は生かされないように思われるが、もっと大きなスケールで言えば、来たるべき〝大改革〟が完了したあとでこの科学者たちの研究は他の惑星との協力態勢をととのえるのに役立つであろう。だからその意味では清家氏やその他の優秀な科学者たちの業績はすばらしいのである。

〈以下は再び各国GAP宛となる〉

メキシコのドゥランゴの事件（円盤着陸事件）については、メキシコ大統領の顧問に手紙を出しました。その顧問は私の友人ですが、まだ返事がありません。情報が来て公表の許可が与えられれば詳細をお知らせしましょう。

ミシェル・コラン（クレメント十五世）が一九七一年二月十日付で私宛に（ハンス宛に）手紙をよこしました。その中の一部分を引用します。

「スペースブラザーズが私に（十五世に）語ったところによりますと、あらゆる準備がととのっているということです。彼らはただ〝ゴー〟を待っているだけで、その状態になった場合は〝ポジティヴな（肯定的、積極的な）人々〟のすべてや、あらゆる国の〝選ばれた人々〟のすべてを救出するでしょう。

しかしその事態がいつ発生するかはだれにもわかりません。これはたぶんブラザーズが地球人とは異なる方法で時間を測定しているためでしょう。しかし一つだけ断言できるのは、それが今後十年以内に発生するということです。もうあまり時日はありません。その発生時に私たちがどこにいようとも問題ではありません。スペースブラザーズは救出すべき人々が居合わせる場所を探知するでしょう。

現在ブラザーズは地球を取り巻いており、遠からず地球上のあらゆる分野に、新聞、テレビ等に影響を与えるでしょう。古い世界はまもなく終わるでしょう。・・・・・アルバニヤからローマまではほんの一歩の距離にすぎません。中共は同盟諸国と共にイタリヤを通過してヨーロッパを席巻するでしょう」

一九七〇年七月三十日付書簡でミシェル・コランはアダムスキーに言及して次のように述べております。

「あなたの（ハンスの）手紙を受け取った日の夕方に、眼のとどく限り大空一面に円盤が大挙して飛来しました。その時アダムスキーや私の知らない人々が出現しました。今やジョージ・アダムスキーは両手を広げて待っています・・・・・」

友よ、気楽にして下さい。時間は急速に経過しつつあり、私たちが共に会える日は遠くありません。その時地球に対するコズミック・プランが恐怖に満ちた人類の眼前で展開するでしょう。

〈一九七一年三月十九日付、ハンスより編者宛私信の一部〉

君の手紙が今日とどいた。有難う。この書状と共にミシェル・コランに関する情報を同封する。彼は真実のコンタクティーであり、金星人と火星人とにコンタクトしている。君が彼に関してもっと詳細を知りたければ、フランスの彼宛に直接照会するとよい。彼は宗教的な人間なので、君や私が探し求めている真実は、宗教的なカムフラージュの奥に見出されるであろうということを記憶してくれたまえ。

ゆえにあらゆるオ・ソドックス・カトリックがコランを否定するのは当然である。コランはキリストによって教皇クレメント十五世になるように選ばれたと称しており、彼が〝反キリスト〟派だと呼んでいるパウロ六世のかわりに教皇の座につくべきであると言っている。

例の金星の絵画については、いつか互いに会えるまではこれ以上話すわけにはゆかない。

〈一九七一年四月四日付、ハンスより各国GAPリーダー宛のコーワーカー・レター〉

ミシェル・コランの活動における宗教面について照会してきた一リーダーがありますので、それについてお答えいたします（これは暗に編者をさしたもの—編者）。

彼の宗教活動に執着する必要はありません。ご存知のように今日の大きな難問の一つは、殆どの人が宇宙的フィーリング（直感・テレパシー）で感知しないで、自身のエゴで考えているという点にあります。ゆえに人々は真実を誤解する結果として、恐怖しがちです。（以下次号）

質疑応答

IGAP—J

問　本誌第四十五号の〝テレスコープ〟欄に「壮大な理論を展開する哲学者も無名の一労働者も、つまるところ同じ程度の人間なのであって、ものの考え方に大差はない」と書かれてありました。私はアダムスキーの〝生命の科学〟を読んで以来、だれでも同じ程度の人間である証拠がほしいと思っておりました。なぜ代表がそう考えられるようになったか、くわしく教えて下さい。（横浜市　中村和晴）

答　まずこの地球上の人間の殆どは知力のみ発達して宇宙的感受力が発達しないために、テレパシックな感覚でもって外界の現象を感知することができませんので、壮大な理論を展開する哲学者といえども切迫した危機を感知できなかったり、他人の心を読み取ることが不可能であったりするために、現世のもろもろのトラブルをまのがれ得ないわけで、こうした宇宙的感覚力の未発達な点においては職業を問わずに万人があてはまるでしょうから、結局人間はみな同じ程度だということになります。

次に職業に貴賤はないという古来からの鉄則があります。きわめて単純な理論ですが、これほどに明快な真理はありません。壮大な理論を展開する（あまり壮大なのは見当りませんが、）哲学者といえども、労働者が食物を作ったり家を建てたりしてくれなかったら生きていられないでしょう。一方哲学者が存在しなければ思惟方法が確立されず、学問等が大系化できなくなります。結局両方共不可欠な存在であり、その意味でも両者は〝同じ程度の人間〟です。

問　ア氏は死亡から再生して受胎するまで数秒しかかからないと言っています。一方では新たに生まれる人は宇宙の法則を知って生まれてくるとも言っておられました。するとその法則を知るのにも数秒しか必要としないのでしょうか。（滋賀県　関谷正明）

答　ご質問の意味がよくわかりませんが、これは前生からの記憶に関連した問題なのだろうと思います。人間生まれた時は大なり小なり宇宙の法則に関する前生からの記憶を持って運ぶのですが、あまり進歩していない人は出生時にその記憶を失うために、自分自身のアイデンティフィケーション（自分の正体）がわからなくなり、また一年生から学習し直しということになるので、転生の際に記憶を保ち続け得るように自分を進歩させる必要性があるのだという意味のことをア氏が何度も説いたわけです。

問　トゥルーマン・ベサラム氏についてその後情報が入っていますか。（同）

答　全然ありません。

問　聖書やGAPでは血を食べる動物を食べてはいけないとされていますが、その理由は？（同）

答　生きた動物を食い殺すライオン、トラ等の肉食動物は全身に狂暴な低次な波動が充満しているために、人間がこれらの動物の肉を食べれば悪影響を受けるので、ウシやその他の草食動物の肉を食べるのがよいとされています。ア氏は菜食を主張してはいません。

私が相手に尋ねたあらゆる質問の場合と同様に、この質問にも私はジェスチャーや顔の表情や心中のイメージなどをつけ加えた。こちらが話している言葉の意味を相手が理解していることを確かめようとして、私はどの質問も少なくとも二回くり返した。すると相手の眼の表情は、理解した時や、私が尋ねようとしている事柄について相手の心中にまだあいまいな点がある時などをはっきりと示した。また私はこちらが相手を正しく理解していることを確かめるために、相手が与えた回答をくり返してみた。

相手は彼らの来訪が友好的なものであることを私に理解させた。また、相手はジェスチャーによって地球から放射される放射線に関係があることも理解させた。

このことはよくわかった。というのは、よくあることだが、砂漠から熱波の多量の放射線が出ているからである。たとえば暑い日の舗装路やハイウェーからしばしば出る熱波のようなものである。

相手は熱波を指さして、次に天空を指さした。

この関心は巨大な放射能雲を伴う地球の核爆発のせいではないかと尋ねてみた。

— 連載第3回 —

新訳　空飛ぶ円盤実見記

ジョージ・アダムスキー

写真は金星人の足跡を石こうに取る人々．ひざまずいているのがウィリアムスン．

第2章
記念すべき十一月二十日(2)

相手はたやすく理解し、肯定してうなずいた。

私の次の質問はこの事は危険なのかどうかということだった。そして私は心中に或る破壊の光景を描いてみた。

これに対しても相手は肯定してうなずいたが、その顔には立腹や非難の様子はなかった。その表情は理解と大いなる憐れみのそれであった。ちょうどわれわれが、無知と理解力のなさによって過失をおかした愛すべき幼児に対して持つような憐れみである。この憐れみの感じは、その問題に対する私の質問を更に続けているあいだも相手の中に保たれているように思われた。

その核爆発は大気圏外に影響を及ぼすのかどうかを私は知りたかった。

再び相手はそうだというようにうなずいた。

この点についてここで触れておきたい。いわゆる宇宙線は地球の大気圏内よりも大気圏外の方がより以上に強力であることが地球の科学者によって知られている。したがってこれが事実とすれば、各国によってテストされている核爆発の放射能も一度地球の大気圏を離れれば、宇宙空間の方がも

っと強力になると考えるのは筋道が立っていないだろうか？　筋道の立った推論ならばこの宇宙人の説明を支持することになる。

しかし私は核爆発が大気圏外の物に影響を及ぼすばかりでなく地球人にとっても危険であるかどうかをしつこく知りたがった。

相手は両手のジェスチャーによって核爆発から起こるキノコ雲を示しながら、こんな爆発があまり多く行なわれるならば危険だということを私に理解させた。そうだ！　相手の肯定的なうなずきはきわめて積極的で、この場合は「イエース」という言葉さえ発した。両手と腕の動作でキノコ雲を描くのは容易だが、爆発を表現するために相手は「ボーン！ボーン！」と言った。続いて更に説明するために相手は私に触れて、次にそばに生えている雑草に触れ、次に大地を指さして両手を大きくまわしたりその他のジェスチャーなどによって、あまり多くの「ボーン！」をくり返すとみんな破壊されるという意味をあらわした。

これははっきりわかったような気がしたので私は話題を変えて、あなたは私が写真に撮ったあの円盤に乗って金星から直接に来たのですかと尋ねてみた。

すると相手は振り向いて近くの低い丘の背後を指さした。

そこには地面の少し上の空間に私が先ほど見て、もういなくなったと思っていた例の円盤がいた。私は相手に対してすっかり夢中になっていたために、相手のうしろの谷間のくぼみの方を見ることを忘れていたのだが、そこには円盤が帰っていて、ずっと空中に停止していたのだ。

相手は私の驚きを楽しんで、心から愉快そうに笑った。しかし私を嘲笑しているとは思えなかったので、気おくれはしなかった。

私も一緒に笑った。そして、あれに乗って金星から地球へ直接に来たのかと尋ねた。

相手は打ち消すように首を振り、あの円盤は大きな宇宙船に乗せて大気圏内に運ばれて来たのだということを私に理解させた。

われわれが最初に見た大宇宙船を思い浮かべながら、あれがそうなのかと聞いてみた。

そうだというふうに相手はうなずいた。

そこで私は今見ている円盤のような多くの小型機が大宇宙船の内部にいる光景を心中に描いてみた。すると相手の表情によって相手がこちらの心中のイメージをキャッチしていることがわかった。私はこの大宇宙船を航空母艦に比較してみた。

相手のうなずきによって、これは正しいことがわかった。

そこで私はその大宇宙船を〝母船〟と呼んでよいのかと尋ねた。相手は〝母船〟という言葉がわかったようだった。そのうなずきは「理解した」という微笑と共に行なわれたからである。

次に、その〝母船〟の近くに現われた米国の飛行機や、私が円盤を撮影していた時に低空に降りて私を観察した飛行機群が相手側を妨害したかどうかと尋ねてみた。

これに対して先方はうなずきながら「イエース」と答えた。

次に私は質問した。「あなたの宇宙機はどんな方法で作動するのですか？どんな動力を用いるのですか？」

相手はメンタル・テレパシーの大変な達人だったけれども、私は心中にこの質問のイメージを描くのに骨が折れた。できるだけうまく両手を使ってジェスチャーをやったが、こちらの質問の意味を相手にわからせることに成功するまで数分間を要した。しかしついにうまくいった。

相手が私に理解させたところによれば、それは吸引と反発の法則によって作動するということで、相手は小石を拾い上げてからそれを落とし、再

びそれを捨い上げたりしながら、小石の動き（引力による動き）を示した。

今度は私が自分の理解を確かめるために、二個の小石を拾って、それを一個が磁石で他の一個を引き寄せているかのように互いに接近させておいて、「マグネティック」という言葉を発しながらそのように説明した。これを少しやったあとで彼は私にむかって、私が何度も口に出した「マグネティック」という言葉をくり返しながらうなずいた。

それから相手は「イエース」と答えた。

ここで私は今までしばしば報告された極小型円盤について思い出した（直径数十センチから一メートル前後の小さな円盤を意味する—編者）。これは容易だった。というのは自分の両手で小さな輪を作り、次に停止している円盤と相手とを指さしたからだ。そのあいだ私はこの極小型円盤が人間の手で操縦されているかどうかを考えてみた。

彼はすぐに理解し、首を横に振って打ち消した。そして相手も両手で小さな輪を作りながらそれを眼の高さにまで上げて、次に自分の円盤を指さし、更に空を指さした。それで私は相手が大宇宙船を考えていることがわかった。

このことは、たびたび目撃が報告されている極小型円盤はもっと大きな宇宙船——いわゆる円盤または母船——の眼を意味することがわかった。これは無人の遠隔操縦機なのである。この事を心中で考えていると、相手は私の考えが正しいことを確証した。

そこで今度は強烈な閃光を発する宇宙空間の或る爆発を描いてみた。

これが心中で描かれると彼は笑って、その場合は極小型円盤に故障が起こったためにそれを発射した宇宙船へ引きもどせない状態にあることを私に理解させた。その時コントローラーが逆流すなわち短絡を起こさせて爆発させるのである。しかし相手は、この爆発は地球上の人間に危険のないはるか彼方の空間でいつも行なわれるのだと言った。

ふと、相手が神を信じているかどうか尋ねてみようと思った。これは相手が理解しなかった。神という言葉を知らないからだ。しかしどうにかこちらの心中に何かを描き上げることができたので——相手は私をジッと見つめていた——、次に片手を用いて大空と大地とその他の万物をあらわして「万物の創造主」という言葉を発してみた。

この言葉を数度くり返した相手は私の想念を理解した。私のジェスチャーはあまりよくなかったと思う。

彼は「イエース」と言った。

私がはっきり気づいたのは、彼は当然われわれが使用する〝物の名前〟を理解するはずはなく、彼にとって神はおそらく別な言葉か名前で表わされるだろうということである。

しかし相手はジェスチャーと心中のイメージにより、少し長く念入りに説明することによって、地球の人間は創造主について殆ど何も知っていないということを私に理解させた。言いかえれば、われわれの理解は浅いのである。しかし相手側の理解ははるかに深くて、しかも地球人のように物質の諸法則に執着しないで創造主の法則を固守しているのである。相手は自分自身を指さしてから次に天空を指さして——これは相手が住んでいる惑星を意味することがわかった——、彼らは地球人のように個人の意志で生きるのではなくて創造主の意志に従って生きているという想念を私に伝えた。

次に私は今回と同じような円盤の着陸が今後も行なわれるかと尋ねてみた。

すると相手は、今までにも多くの着陸があったが、今後も多く行なわ

れるだろうと答えた。

宇宙人は金星だけから来るのか、それとも別な惑星や別な太陽系からも来るのかと尋ねたが、今度も私の想念を伝えるのに少々骨が折れた。しかしついにうまくいった。

これに対して相手は、この太陽系内の別な惑星（複数）から地球へ来る人々もあるし、別な太陽系（複数）の惑星（複数）から来る人々もいることを私にわからせた。

アリス・ウェルズが双眼鏡でながめながらスケッチした金星人の像。

私は長いあいだこの事についてうすうす感づいていたので、相手の答えに驚かなかった。だが今知りたいことがあった。「他の惑星の人々にとっては宇宙旅行は普通の風習になっているのですか？　それは容易なことなのですか？」

相手はこの二つの質問に答えて「イエース」と言った。

私は、これまでに地球上で発見された円盤——どうやら墜落したと思われる円盤（複数）——内に死体があったという報導（複数）を思い出した。それで、相手側のだれかが地球へ来た時に死んだことがあるかと聞いてみた。

相手は肯定してうなずいてから、彼らの宇宙船内で時々故障が起こったのだということを私に理解させた。

これは私にもわかった。というのは私たちのグループが最初に見た例の大宇宙船も私が撮影した小型の円盤も機械的な宇宙機であることを知っていたからである。機械的な装置なら何でも故障というものは起こるのだ。

しかし私は満足しなかった。相手は私の感情を害さないようにしているのだなと感じたが、私は真相のすべてを知りたかった。そこで、宇宙人の死に対して地球人に責任があるかとしつこく聞いてみた。

これに対する相手の答えは「イエース」だったが、両手を数度上げて他のジェスチャーと一緒に彼らの〝事故死〟が何度あったかを話そうとした。

しかし私はその数を把握できなかった。相手が実際の数を示そうとしたのか、それとも相手の表示は数十倍または数百倍しなければならないのか、あるいはわれわれの計算法による如何なる数字で乗ずればよいのか、私には見当がつかなかった。

これまで私は多くの人と論じ合ったが、その際しばしば出された一つの質問を思い出して、なぜあなたがたは人口過密な場所に着陸しないのかと尋ねてみた。

これについて相手が私にわからせたところでは、もし公然たる着陸が試みられるならば、地球人がひどく恐怖して円盤の乗員を八つ裂きにし

てしまうだろうという。

相手の言い分が全く正しいことは私にわかった。そして安全に着陸できるような日が来るだろうかと考えてみた。また、こんな日が来るとすれば相手側は公然たる着陸を試みるかしらと思った。

そうした考えが心中に起こった時、相手はこちらの想念を読み取って、そのような時代は来るだろうと言った。そうなれば人口過密な地域に着陸するだろう。だがそれはすぐのことにはならないということをはっきりと私に理解させた。

二人の会話の始め頃、この金星から来た人にこちらの質問を理解させるのにジェスチャー用として両手を使用する必要があることに気づいた時、すでに私は地上にコダックカメラをセットしていた。そこでそれを取り上げて、あなたの写真を撮ってよいかと尋ねてみた。

相手は私の願いを理解したと思う。なにせ私の心を読み取るのがすばらしくうまいからだ。また相手は私が害意を持たないことを知っていたと確信する。なぜなら私がカメラを取り上げた時に先方は恐怖の様子を見せなかったからである。いうまでもなく、相手は写真に撮られることを拒絶した。それで私もしつこく頼まなかった。

私は別な惑星（複数）から来た人々が地球の路上を歩いているということを何度も聞いたことがある。だからこれが事実とすれば相手が写真に撮られたくないという望みは私にもよく理解できる。というのは相手の顔つきに二、三の特徴があったからだ。普通はこの特徴は目立たないが、写真に写るとそれが顕著になって、すでに地球へ来ている彼の仲間たちの正体を知るポイントとして役立つだろう（表紙写真を参照）。しかし私は相手の願いを尊重して、この問題に深入りして尋ねるのは賢明でないと感じた。

だが、だれか地球人のなかで宇宙船に乗せられてつれて行かれた者があるかと質問した。

彼は大きく微笑して、肯定して軽くうなずいた。ただし相手はこの問題についてあまり教えたがらないのだなと私は思った。

もう一つ質問を出してみた。——私の知っている或る特殊なケースに関するものである。

相手はこの質問に答えてくれたが、他言するなと注意した。実際私は現在洩らしてはならないような多くの物事を相手が話してくれたと、ここでつけ加えておきたい。

さて、話題を転じて私は人間の住んでいる惑星はどれくらいあるのかと聞いてみた。

すると相手は宇宙の莫大な数の惑星にはわれわれと同様の人間が住んでいると言う。

そこで私は話をもっとこまかくして、この太陽系内にはどれだけの惑星に人間が住んでいるのかと尋ねた。

相手は片手で大きな輪を描き、それを全部抱きかかえるような動作を行なって、この太陽系の惑星全部に人間が住んでいることを意味するような身振りを示した。

私は相手の意味することをこちらが正しく理解したのかどうかと思ったが、相手は「君は理解した」と断言して私を納得させた。

当然のことながら私の次の試みは、如何なる惑星の人間といえども地球人と同じ形をしているのかと尋ねることにあった。

この質問に対する相手の答えには力がこもっていた。あたかも真実を知っているかのようである。それで私は人間のからだの形というものは

いずれの世界でも殆ど同じものであることを明確に理解した。彼はなおも説明を続けたが、惑星ごとに人間のからだの大きさ、皮膚の色、肌のキメなどが異なるのか、それとも地球と同様に各惑星にも人種の混合があるのか、私にはよくわからなかった。筋道の立った分析をしてみれば後者の方がありそうに思われる。

大抵のオーソドックスな科学者が出している結論とは反対に、私にとっては他の惑星群が地球と同様な住み家でないと考えるのは常に誤りのように思われていた。

あらゆる惑星は明らかに類似の物質で作られている。しかもみな同じ宇宙空間内で回転しているのだ。大きい惑星もあろうし、他よりも小さいのもあり、みんな種々の発達段階にあるのだ——絶えまなく変化しながら——。これは万物にあてはまることである。その物が何であろうと、どこにあろうと、そうなのだ。

反射望遠鏡は完全な回答を与えてはくれないだろう。というのは望遠鏡は一惑星から来る光を反射すると同時に、大気中や宇宙空間や目標惑星の大気中に動いている微粒子をも映すからである。

あらゆる所に存在している無数の移動性微粒子の妨害を除去するようなすぐれた装置が開発されるまでは、反射望遠鏡では宇宙空間の如何なる天体についても正しい理解を得ることは不可能である。

一方、多くの論議の的になっている宇宙プラットフォームが実現するようになれば、宇宙空間に関する事実を科学者たちは理解するだろう。このために、今日事実として認められている多くの理論はくつがえされるだろう。

この大気圏内に宇宙船が出現したことや、私が今体験したような個人的なコンタクトは、従来の天文学上の諸説が間違っていることを立証している。それは人間の世界一周の航海によって地球は平たいという昔の説が誤りであることが立証されたのと同じほど完全な間違いなのだ。

さて、別な惑星にも人間がいるというからには、その人間たちも地球人と同様に死ぬのかどうかを私は知りたかった。

するとその問題を私にはっきりさせるために、相手は自分のからだを指さして肯定的にうなずいた。——肉体は死ぬというのである。だが自身の頭を指さして—それを私は相手の精神または知性を意味すると解したのだが——否定的に頭を振った。この部分は死なないのだ。更に手振りによって相手はこの〝知性〟は発達し続けるのだという印象を与えた。それから相手は自分自身を指さして、彼もかつてこの地球上に住んでいたことを示した。次に天空を指さして、今は宇宙の彼方に住んでいるということを意味した。

私はこの種の惑星間の転生（生まれ変り）に要する時間について知りたかったが、相手からうまく回答を得ることができなかった。私は一つの印象を受けたけれども、それが正しいとは断言できない。あまりにも多くの想念が心中を通過していたからである。たぶん考え違いをしていたかもしれない。

時間の観念がわき起こり始めたが、まだ尋ねていない質問が多く残っていた。それらを思い出そうとしながら最重要な質問をきめることにした。

私がぜひとも尋ねたいと思っていた一つの質問は「月には人間が住んでいるか？」である。私は人間が住んでいると信じており、惑星間飛行をやっている他の惑星の人々が月面に基地を持っていると考えている。他の惑星群やそれを取り巻く大気に関する私の説には月も含まれているのである。

だが私はこの質問を忘れてしまった。今後また宇宙人と話す機会があれば、忘れずにこの質問を発したいと思う。

また私は相手に名前を尋ねなかった。しかしこのような場合には名前や個人的な事柄は全然問題ではない。そんなものは殆ど意味はないし、全く取るに足りないことである。たぶん今後何度も私が相手と会う特権が与えられるとすれば相手の名前を尋ねるかもしれない。だが他の宇宙人とコンタクトすることが許されて、それが多少ともこのコンタクトと似ていたとしても私は相手の名前を尋ねないだろう。実際、後に或る人がそれについて私に問い合わせるまでは、この点について考えもしなかった。

相手もわれわれの雑談が終りに近づいてきて、円盤に帰らねばならないという印象を受けたにちがいない。相手が自分の両足を指さしながら、私が全く聞いたことのない言語で話し続けたからだ。その言語は、かつて地球上で話された古代語の一つであったと思われるような言葉と中国語との混合のように響いた。ただしこのことを事実として知る方法はない。ただ聞いた時の私の反応にすぎない。相手の声は全く音楽のように聴こえた。

相手と話と、それに両足を指さしたことから、そこには私にとって何か非常に重要な物があるにちがいないと感じた。そして相手がそれまで立っていた場所から一歩横へ寄った時、そのクツの跡として不思議な紋様が地面に残っているのに気がついた。相手が理解させたがっているものを私が理解しているかどうかを知ろうとして相手は私をジッと見つめた。そして私が理解して「よろしい」という意味を示すと、相手は注意深く更に別な場所へ、そして更に別な場所へ足を踏みつけた。こうして相手は三組の深くて明瞭な足跡をつけたのである。相手のクツは宇宙旅行用に特別に作られたにちがいなく、クツ底にしっかりと浮彫りされた紋様はこのような深い足跡を残すために彫られたにちがいないと思う。

すると一緒について来いという合図をしたので、二人は向きを変えて並んだまま、待機している円盤の方へ歩いて行った。

それは美しい小型機であった。コーヒー台皿というよりもむしろどっしりしたガラス製の鐘に似た形をしている。最近のオフィスビルディングや家屋等で一般化しているガラスブロックは、コンクリートの壁などよりも多くの光を通すけれども、それをすかして内部を見ることはできない。それと同様に私はこのガラス状の機体をすかして内部を見ることはできなかった。

それは半透明で絶妙な色を帯びている。

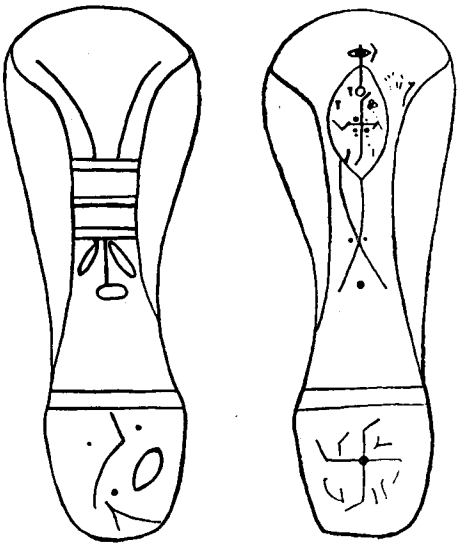
われわれが近づいた時、私は機体の内部で動いている人影のような形に気づいたが、はっきりした輪郭はなく、それが男か女かはわからなかった。

しかしここで誤った情報が伝えられてはいけないので言っておくが、この円盤は絶対にわれわれが知っているようなガラスでできているのではないと思う。それは特別な工程による金属なのである。これについては次のように説明しよう。

カーボンは柔らかな不透明な元素である。ダイヤモンドは澄んだ固い石で、光にさらすと鮮かな種々の色を放射する——しかも殆ど破壊できない。しかし根本的にはダイヤモンドはカーボンである。熱と圧力という自然の工程を経て、大自然は柔らかいカーボンを固いダイヤモンドに変えたのである。

地球の科学者はこれと同じ原理を研究しており、或る程度は成功している。

金星人のクツの裏の紋様



宇宙の法則にはるかに精通している他の惑星の人々は、この法則を学び、実用的な目的に応用していると私は信じている。彼らは元素類を不透明な段階から半透明な段階にする方法を知っており、しかもダイヤモンドのように固くて破壊できないようにしているのだと思う。この円盤もこのような材料で作られたのだ。

このスカウト・シップ（偵察用円盤）の場合のように彼らの小型円盤の一つにこんなに接近したあとで、今私が確信するのは、われわれの眼やカメラでさえ捕えにくいのに、姿を見せるのに或る種の密度を必要とするレーダースクリーン上に姿を現わすのは、この固体の性質であるということだ。というのは、光だけかまたは雲に反射する光などはレーダースクリーンに現われないということをレーダーのオペレーターから聞いているからである。雨雲やイオン化した雲ならよいが、普通の雲もだめなのである。

また円盤がしばしば一定の形のない種々の色光として現われるのは、円盤が使用するパワーとこの半透明な性質によるものである。

さてこの円盤は地上に浮かんでいた。機体の向う側は地上から一、二フィート離れている。そして丘の土手に接近していた。しかし丘の斜面のために円盤の前面すなわち私に最も近い部分は地面から六フィートは充分にあった。三個の球型着陸装置がフランジ（凸縁）の縁の下に半分ほどのぞいている。時折突風が強く吹いて、そのため機体が揺れた。すると機体の表面に反射している日光のために美しい虹色の光線が放たれた。まるでスモーキー・ダイヤモンドから放射されるようだ。

これは遠くから凝視し続けていた他の六名にも見えた。

日光のなかに虹色の色光がきらめく時の華麗さによって、私がこれまで円盤について持っていたあらゆる考えは吹き飛んでしまった。これは現実の美しい光景なのだ。多くの疑問に対する解答が今ここにある。長く胸に秘めてきた願いはかなえられた・・・・・。今私の眼前に、砂漠の静寂さの中に無音のまま、まさに飛び立とうとしているかのように空間に浮かびながら、別な惑星で作られたこの宇宙船がわれわれの接近を待っていたのだ！

私を圧倒させたこの経験の強烈な実感・・・・・私は無言であった。私はもう地球だけに関係ある者ではない。むしろ、同時に二つの世界に住んでいるようなものである。たとい百才またはそれ以上生きたとして

も、地球の姉妹惑星たる金星から来た円盤に初めて接近したこの歓喜とスリルを決して忘れないだろう。

機体に近寄った私は頂上に重いレンズのように見える丸い球があるのに気づいた。それは輝いている。これは宇宙空間を飛ぶ時に空間からパワーを吸収する磁気柱の一端として使用されるのかなと考えてみた。円盤の写真中にはこの球が大きなリングのように見えている。これは母船内で円盤を適当な位置にとめるために使用されるのではないかと後になって人から質問を受けたが、そうではないと思う。ただし母船内で磁気の力によって円盤が所定位置につり下げられるとすれば別である。これは容易に考えられることだ。

円盤の上部はドーム状で、ギャーをつらねた一個の輪すなわち重いコイルがはめ込まれて、ドームの基部の側壁を取り巻いている。これもまるで電気がその中を通じているかのように輝いていた。

側壁の周囲には舷窓（複数）があるが、周囲全部にぐるりとついているのではない。というのは、一個の球型着陸装置のすぐ上部の側壁がただの壁面なのに気づいたからである。他の二個の球の上部もそうなのかはわからない。機体のまわりを歩いてみなかったからだ。このカバーされた舷窓は異なる材質または密度を持つ材料で作られているにちがいない。窓が澄んで透明だからだ。

そして一度だけ瞬間的に一人の美しい顔が現われて外部をのぞいたのが見えた。内部にだれがいたにしても、外で私と一緒にいた人を待っているのだなと私は感じたが、声は発せられなかった。その顔は急速に消えたので私はちらりと見ただけだが、その人も、私と一緒に話し合っている人と同様に長い髪をしていることに気づいた。

円盤下方の外部はフランジのように作られていて、非常に輝いているけれども、一片の金属ほどになめらかではない。それは一種の層（複数）をなしているように見えたが、階段として使用されるものではないようだ。というのはいわゆる階段の形とは逆にふくらんでいるからである。こんな構造になっている理由がわからないが、何かの目的があるのだろう。（注＝この部分の原文は意味が少々不明瞭であるが、クック夫人の説明によれば次のとおりである。すなわち普通の階段は〈　　〉のようになっているが、円盤の外層は〈　　〉のようにふくらんでいるのだという。これでは足がすべって登れないだろう）

機体に接近して私はこの奇妙な美しい宇宙機を詳細に観察するのに熱中してしまい、如何なる方法でこんな空中停止状態を保っているのかと考えてみた。

宇宙人たる相手は機体に近寄りすぎるなと私に注意し、彼自身も機体から一フィートばかり離れていた。だが私は相手よりも少々接近しすぎていたにちがいない。というのは話しかけようとして振り向いた時、私の右肩がわずかにフランジの外縁の下に来たとたんに腕がぐいと引っぱり上げられてから殆ど同時にからだにむかって投げ落とされたからである。その力があまりに強かったので、腕を動かすことはできたけれども、機体から離れた時、腕に感覚はなかった。

相手はこの事故に全く心配そうな顔をしたが、もともと相手は注意していたのであって、責任は私にあるのだ。しかし相手は、時が経過すればよくなるだろうと言った。それから三ヵ月後に相手の言葉が正しかったことがわかった。腕の感覚がよみがえったからだ。ただ時折、深い打撲を受けた骨のキズのような突き刺すような痛みが起こって、その事故を思い出させた。

（原著者注＝著者が腕を痛めた時、相手は私を救おうとして腕をつかもうとした。その時相手は自身の手をフランジにちょっとこすって血を

出した。それは地球人と同様の赤い血であって、これにより宇宙人が地球人とは異なる身体組織を持っているという説はくつがえされるようである)

その時私は腕よりもむしろ右側の上衣ポケットに入れたままの撮影済ネガの方が心配になった。それでただちに手を入れて反対側のポケットに移そうとして取り出した。

そのネガを手に持っていると、金星人は手を伸ばして、それが欲しいという意味を示した。機体から出ているパワーがフィルムを或る程度だめにしてしまったのかもしれないということに相手が気づいたかどうか、私にはわからない。

しかし相手の要求に応じて私がホルダーの束を全部差し出すと、相手は一番上のホルダーだけを取って、それを服の胸の部分に入れた。だが入れる穴やポケット類は見当らない。

入れてから相手はそのホルダーをあとで返すということを私に理解させたが、どんな方法で、いつ、どこで返してくれるのかはわからない。

円盤に乗せてもらえないかと聞いてみた。

すると彼は首を横に振った。

そこで、円盤の内部がどんな様子なのか見たいので、ちょっと中へ入らせてくれないかと頼んでみた。

しかし相手は丁重に微笑しながら、もう行かなくてはならないので今はだめだと言う。

私は少々失望したが、別な時にまた機会があるかもしれないという希望もわいてきた。

私は円盤の中へ入ることを許されなかったので、その構造や気密装置などについて質問されても答えることはできない。だが彼ら宇宙人は地球人が水中航行用の潜水艦の建造法を知っているのと同じように宇宙船の建造問題も解決してしまったのだと私は考えている。宇宙空間の諸問題も水中の問題も航行の点では似たようなものだと思う。どちらも流動体である。水は液状のガスにすぎない。宇宙空間は自由な状態にあるガスから成り立っている。

数歩の優雅な歩みによって相手は円盤の背後の土手の所へ行って、フランジの上に登った。少なくとも私にはそのように見えた。入口がどこにあるのか、相手がどのようにして中へ入ったのかはよくわからないが、円盤が無音で上昇して飛んで行くにつれて少し回転したので、フランジの中央辺に小さな入口があって、それがスライディング・ドアーのような物で閉じられているのが見えた。

また私は二人の乗員が互いに話し合っているのを聞いた。彼らの声は音楽のようであったが、その言葉を理解することはできなかった。

円盤が動き始めた時、フランジの下に二つのリングと、中心部の円盤状外形の周囲に三番目のリングがあるのに気づいた。この内部の一個のリングと外部のリングは時計方向に回転しているようだが、この二個の中間にあるリングは反時計方向に動いていた。

私はこの山あいの奥まった場所に立ちながら——美しいスカウト・シップが無音のまま山頂をすべるように越えて大空の彼方に消えて行くのをただ一人で見つめていたのだが——私のからだの一部分が円盤と共に空を飛ぶような感じがした。というのは、奇妙に聞こえるかもしれないが、あの金星人が眼前にいた時は偉大な愛と理解に満ちた英知とのあたたかい抱擁を受けたような気がしたが、去ってしまうとこのあたたかい抱擁が消えてしまったように感じたからである。

あたかも非常にいとしい人が去ってしまって、その人に対するあこが

れが胸に残っている時のような感じに比較できる空虚さである。しかもこの手記を書いているこの日に至るまで、あの別な惑星から来た人を思い出すたびに同じ空虚さとあこがれとを感じるのである。

一方、地球とは別な世界から来た友を一眼見ることが許されたという特権に対して言いしれぬ喜びを感じてきた——しかもその一人と話し合ったというこの恍惚感。

さて小型円盤が完全に視界から消え去ったあと、私は金星の友が非常に強く私の心中に刻みつけたあの足跡の所へ急いで引き返した。

その方へむかって歩きながら私は相手の足跡と私の足跡のいずれも円盤の方へ歩いて行ったとおりに刻まれていることに気づいたが、相手の足跡はいずれも私のものよりも深くついていた（原著者注＝金星の重力は地球のそれよりも小なるがゆえに、金星人が地球上に立てば体重が増加するのである）。相手がわざと足跡をつけた場所へ着いた時、私は小石を数個拾って足跡のまわりに並べながら囲いを作った。そうしておけば仲間を呼び集めて見させたり、ウィリアムスン博士に石膏を取らせたりできる。

ウィリアムスンが石膏取りをやれることは私にわかっていた。彼は人類学者としてこのような物事に豊富な経験を持っていたからである。それで今度の旅行にもわれわれは不測の事態にそなえて準備怠りないように努めて石膏の小袋も携行していたのである。

すでに一同で打ち合わせておいたとおりに仲間たちに合図をするためにハイウェーへ行く途中、私は望遠鏡用のカメラと一緒にブローニー判カメラも箱の中に入れようと思って望遠鏡のそばでちょっと立ち止まった。

彼ら全員も凝視していたので、小型円盤が離陸した時に空中でピカッと光ったのを見ていた。しかし彼らが見ていなかったとしても、付近一帯を沢山の飛行機が旋回していたので、何かが起こったことに気づいたことだろう。しかも一機の大きなB－36が現場のすぐ上空に出現していた。これらの飛行機の騒音は、われわれ一同が見たあの二種類の宇宙機（母船と円盤）の無音の動きとはひどく対照的であった。

興奮して自分たちの時計をチェックしていた友人たちは、予定の合図として帽子を振っている私を見て、私の方へ移動を始める準備をしていた。私たちが別れてから丁度六十分が経過している。大体私は彼らに対して、私が合図をしようとすまいと、とにかく一時間待ってから来てくれと言い渡してあった。

一同がこちらへ来るまで道路ぎわで待ってから、このとがった石ころ上を再びドライブするかわりに、みんな車から降りてはどうかとすすめた。

私は非常に興奮していたので——それまでは興奮していることに気づかなかったのだが——殆ど話すことができなかった。一同も興奮して、一斉に質問をあびせ始めた。

私は男と話し合ったこと、男が足跡を残したことなどをみんなに告げた。「さあ——行ってみよう！」それしか言う必要はなかった。

ジョージ（ウィリアムスン）が車中から石膏と二個の混合鍋、それに一ガロン入りの水筒を取り出したので、一同はそろって足跡の方へ歩いて引き返した。

荒っぽい歩きぶりにもかかわらず全員が私に質問をあびせかけてくる。しかし私は別な世界にいるような気がした。私はまるでこの地球上を肉体だけが動いているように感じたし、質問に対する答えを茫然自失の態で発していた。同時に二つの世界にいるようなこの感じは二週間ばかり

続いたが、現在でもあの時の経験の強烈な記憶がふいによみがえってくると、この感じがわき起こるのである。

訪問者と私とが話し合っていた、しかも地面に足跡が故意につけられた場所へ着いてから、みんなは周囲に集まって、不思議な紋様を注目しながらてんでに叫び声を出した。たしかにここには解読するのに骨が折れるようなメッセージがあった。

ベティー夫妻が足跡の写真を撮る一方、すぐれた画才を持つアリスがそれらをスケッチした。左右の足跡がそれぞれ異なる紋様を示しているからだ。

それを写真に撮ったあと、ベティー・ベーリーもす早くスケッチした。私の知る限りでは、これらの写真は明確に何かを示すほどよく撮れてはいない。

足跡のすべてを型に取るほどの石膏はなかった——円盤から訪問者が話しながら立っていた場所へ歩いて来てまた円盤へ帰って行ったあいだに更に十二個以上のはっきりした足跡が残されていたのである。それでジョージは一セットの完全な型と二セットの部分的な型とを取ることができた。

完全なセットは彼が保存研究用に自宅へ持ち帰り、他のセットの内一セットを私にくれた。三番目のセットは彼が持ち帰った。部分的に取った型の中の紋様でもっと明確に見えるのがありはしないか、あれば研究用として細部のはっきりした紋様が得られるのではないかという配慮のためである。

それ以来ウィリアムスンは天文学の図表や古代の記号表示法などに基づいて、この足跡の紋様の解読にすぐれた仕事をしている。

他にもこの紋様の意味を知ろうとして個々に研究をしている人たちがいる。そして多くの事がわかってきたけれども、足跡のメッセージ全部が解読されるまでにはまだ多大の労力を要するのである。

これに関連して私はこれまでに「如何なる方法によれば別な惑星の紋様がこの地球上で解読されるだろうか？」という質問を受けてきた。この人たちが行なってきた推理は次の二通りに分けられる。

1. 発達の程度と宇宙に関する理解が今日の人間のそれよりもはるかにすぐれた古代の文明の跡が地球上のどこかに残されている。だからその文明の知恵の記録である紋様は宇宙的性質を帯びているだろう。注意深い比較によって、足跡の紋様が古代の文明人によって地球上に残された何かの紋様と似ていることがわかったならば、意味のあるメッセージが解読されるかもしれない。

2. 天文学にはそれ自体の記号類がある。もしそのどれかが足跡の中に発見されれば、それらは、他の惑星の人間が惑星間飛行に現在使用している宇宙空間内の道標として理解されるかもしれない。こうして、地球人が自身の想念や努力を宇宙旅行の方へ転じるにつれて、或る援助の手が差し延べられているのである。

足跡が写真に撮られ、スケッチされ、石膏の型が取られていたあいだずっと飛行機群が頭上を旋回していた。地上で何が発生しているのか見とどけようという様子である。旋回を大きくしたり大きくしたりし、ターンする時は機体を傾けたりした。

私は飛行機群の出現には気づいていた。エンジンの音が静寂な砂漠に反響して、時折機影が地上を横切ったからである。だが一時または終始何機の飛行機がいたか、それを数えるほどに関心はなかった。私の思いはさっきの訪問者とその宇宙機とにあったからだ。

数時間が経過してから興奮が少々静まってきて、石膏の型も取られ、

充分に乾いたので、包んで荷作りして破壊のおそれなしに運搬できるようになった。

ジョージとアルはアリゾナ州の或る新聞に報告してよいかと言うので、私はよろしいと答えた。彼らはフェニックスへドライブすることにきめた。そこは最寄りの大きな町で、そこの新聞ならたぶん最大のカバレッジ（報導範囲）を持つだろうと思ったからだ。二人は記事の参考用に多くの質問をしたが、その一つに「円盤はどれくらいの大きさがあったか？」というのがあった。

「約二十フィートだ」と答えたものの、私はまだあの〝茫然自失〟状態にあったので、円盤の大きさを正確に思い出せなかった。私はすでに詳細を述べたが、全部を述べたわけではない。しかし二人の報告を立証するために撮影済フィルムの入ったホルダーを二枚渡した。新聞社が現像して使用したいと思えば、そうしてもらいたかったからである。

一同は望遠鏡やその他の装置をハイウェーまで運んで、すべての物を車に積み込んだ。

持物すべてがつめ込まれ、安全に運搬できるように点検されてから、われわれにとってはこの歴史的な場所を最後にゆっくりと見まわしているあいだ、アルは岩石類と一本の空ビンから成る記念標を作った。もしだれかがあの足跡を再度調査するために近日中に来たくなった場合、その場所をつきとめることができるようにするためである。私は近くのヤブの中に別な記念標を作っておいた。

それから一同は夕食をとるためにデザートセンターへドライブした。たった今味わったばかりの真実そのものにほかならない〝他の世界に関する〟体験と、肉体の栄養という世俗的な物とを関連させようとして、その日の夕方小さなレストランに入ったわれわれは、さだめし超俗的な〝大きな眼をした〟グループに見えたことだろう。

アルが自分の車の中でスピードメーターの指針を確かめていた。それでハイウェー上の出発点からデザートセンターの交叉点まではちょうど十・二マイルあった。これはその日に行なわれた唯一の正確なマイル数の記録である。その他の距離や時間類は概算にすぎない。ただし例外が二つある——巨大な葉巻型船が最初に目撃された時刻と、私が写真を撮ったり宇宙から来た人と話し合ったりしながら仲間から離れていた六十分間という時間である。

十一月二十四日にフェニックス。ガゼット紙が私と金星人とのコンタクトに関する記事を掲載したが、これには新聞社へ報告した四名の目撃者の写真も添えてあった。また足跡のスケッチ写真や非常に出来の悪い円盤写真も一緒に掲載された。この写真はあの時撮影した写真類中最上のもので、私が円盤のパワーに捕えられた時ポケットに入れていたものである。

その掲載記事は真実を伝えたものであるが、二個所だけ例外があった。私はパロマー山頂の大天文台の職員ではないし、パロマーガーデンズの事業の経営者でもない。この誤りは過去に何度も伝えられてきたので、目下それを訂正するために最善をつくしている。

一同が現地を離れた時、沢山の鮮明な足跡が残されていたので、アルとジョージの二人が新聞記者連に対して、あなたがた自身でその足跡を見るために自分たちと一緒に行かないかとすすめた。

これは行なわれなかった。報告がありのままに受け入れられたし、スケッチ類も事実の証拠となったからである。しかしここで私に言わせてもらうと、私に与えられた報告によれば、新聞記者連はその事件を当然の事とは認めていなかった。彼らは最初に疑ってかかり、あらゆる方法

でそれを破壊しようとし、目撃者の幾人かに話を変えさせようとした。一人の記者は四名中の婦人たちに対して、もしおまえたちの話がウソであったらみんな危険な目に会うことになるのだと言った。しかし四名全員は個人的に目撃した事や私から聞いた事実に対して節を曲げなかった。

そこで新聞記者連は興奮した（とはいうもののまだ警戒心が先に立っていた）、そして他の競争相手の新聞社が特ダネを取ってしまうかもしれないという恐れのために事件に関して不完全な記事となり、そのままガゼット紙に掲載されたのである。

読者はこのコンタクトの記事に大変な興味を持ったので、その掲載号新聞は飛ぶように売れて、その後しばらくフェニックス・ガゼット社は全国からの注文をことわり、代金を返送しなければならないほどだった。

自宅で私は少数の人にコンタクトについて語り、相手の反応を得ようとしたが、私が撮った写真類がうまく写っていなかったために、自分を支持するための物的証拠を持たなかった。例の足跡の石膏は、人に見せてこわされたくなかったのである（それで見せなかった）。しかし私は以前に撮った沢山の写真を持っているし、三年以上にわたってこの円盤問題について語ったり講演をやったりしてきたので、このコンタクトの話を聞いた人々の殆どは私の報告を信じてくれた。

なかには恐怖心を示した人もあるし、驚いた人もあり、別なコンタクトが発生した時に一緒に居合わせれば円盤に乗せてもらえるかもしれないので、その際は知らせてくれと言う人もあった。現在私はすぐれた写真類と、多少の前口上はできるが含まれているメッセージの完全な解読にはほど遠い足跡のすぐれたスケッチを持っているにもかかわらず、人々に私の体験を語ると未だにさまざまの反応が残るのである。

また私のコンタクト事件は円盤の写真類と共にカリフォルニア州オーシャンサイドの日刊紙ブレード・トリビューンに連載された。この記事は私に会いに特派された同社の一記者が書いたもので、この新聞も掲載号の全部数をまたたく間に売りつくしてしまった。

☆　☆

これまで円盤を研究してきた人のなかに「円盤も乗員も本来は〝霊体〟なのかもしれず、〝具現化〟する能力があって、そのため地球の大気圏内に入れば〝固体化〟し、〝可視的〟になるのだとは思わないか？」と質問した人々がいた。

これは困難な問題である。もちろん宇宙にはわれわれの夢想を超えた物が存在するので、未だにわれわれが暗いガラスを通して見ているそれらの物に関してあまりに独断的であることは決してためにならない。しかし目下はあの記念すべき十一月二十日に自分で実際に見聞した物事の事実上の説明だけに限ることにしたい。あの〝男〟と円盤の構造や実体は、われわれが指で突き刺せるような希薄な物どころではなかったのである。それはこの三次元世界の如何なる物と同様に〝固体〟であったのだ。

「そうすると彼ら宇宙人が地球の大気圏内で生きて呼吸できるとすれば、宇宙空間ではどのようにして存在を保つのか？」

これは宇宙人たちがすでに解決してしまった事柄である。ちょうど地球の各種の宇宙旅行研究団体がこの問題を解明しようと努力しているけれども——。いずれこうした事はすべて私に洩らされるものと思う。彼らの〝母船〟がこの問題の多くに対する解答となるかもしれないが、技術的な事はいつか別な著書で述べることにしよう。（第二章終り。以下次号）

日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり月例研究会を開催して会員が研さんを積んでいる。特に本年三月の例会からは円盤関係のスライド映写も行ない、多大の成果をあげてきた。都内及び近郊の方はぜひ参加されたい。

1, 日　時　毎月第一日曜日、午後一時より四時半まで。

2. 会　場　豊島区民センター四階会議室。
（国電〝池袋〟駅東口下車。駅前左方に三越デパートがあるから、そこまで行き、同デパートの向かって左側面沿いの道を奥へ奥へと行けばよい。駅より徒歩約三分。乗物不要）

3, 会　費　当日の会場費として百五十円。茶菓が出る。

4, 携行品　テキストとして〝宇宙哲学〟を持参のこと。講師は久保田代表。

◎代表挨拶、経過報告、〝宇宙哲学〟研究、質疑応答、自己紹介、座談会、スライド映写の順。

＊　＊　＊

日本GAP大阪支部でも毎月二回研究会を開催している。特に五月からはスライド映写も実施して、学習効果を高めている。関西地区の方はふるって参加されたい。

1. 日　時　毎月第一及び第三日曜日、午後一時より四時まで。

2. 会　場　尼崎市立　産業郷土会館
（阪神電車〝大物〟駅にて下車。すぐ北側に見える。徒歩二、三分）

3. 会　費　百円。

4. 携行品　研究用テキストとして〝宇宙哲学〟を持参されたい。

超相対性理論

清家新一著

物理学の鬼才清家新一氏が現代最高の物理学理論を駆使して反重力宇宙機を建造せんとする．果して成るかその壮大なる宇宙への挑戦！　本書はそのための超高度な理論の集大成で，シロウトには難解であるがフォン・ブラウンは激賞した．

¥1000　字和島市大宮町1丁目4の12
〒100　イギリス宇宙研究協会日本支部

（下記のものは本会へ直接ご注文のほどを）

本誌旧号

本誌バックナンバー（旧号）は次のものが在庫。部数僅少につき未入手の方は早目にご注文のほどを。送料は不要。低額切手代用にてOK。　各¥200

第43号、44号、45号

☆宮内温夫君の「宇宙哲学画集」無料贈呈！

在カナダの本会幹部宮内君が，在日中にアダムスキーの宇宙哲学をテーマに描いた力作の画集．同君はアダムスキーの講演ポスターその他の秀作により日宣美展に数度入選した有望な若手画家．申込は切手35円だけでオールライト．画集には久保田代表の英文解説付き．

アダムスキー哲学三大名著！

絶賛刊行中

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接に。

1) 宇宙哲学
¥350　〒45
アダムスキー哲学の基本的原理を収録，人間と宇宙との関係を解明した大金字塔．

東京都新宿区納戸町33たま出版

2) 生命の科学
¥420　〒55

3) テレパシー
¥290　〒45
（2）は宇宙哲学を実生活に応用する方法を詳述した書．この実践で奇跡が発生．（3）はテレパシー開発法とその応用による超人的な生き方の指導書．現代最高の書．

東京都文京区白山1—29—12
文久書林

編集後記

◎平素は皆様方の多大なご支援にあずかりまして厚く御礼を申し上げます。おかげ様にて日本GAPは本年で満十周年を迎えることができました。そこで今秋は何か記念的な行事を持ちたいと考えています。具体的に決定しましたらお知らせしましょう。

◎〝なぜ彼らは来るのか〟もいよいよ佳境に入りました。次号には第八章〝或る円盤研究グループとの対談〟を掲載し、余裕があれば第九章〝質疑応答〟の一部分も載せます。すべて事実だということですからご期待下さい。

◎大体本誌はノンフィクション（事実）記事を主体として出発したUFO関係報導誌ですから、個人的憶測、仮説、随想等は避ける方針です。

◎そこで本号から新しいノンフィクションとして〝クレメント十五世〟を連載することにしました。GAP会員の皆様はこの記事でショックを感じるほどにUFO問題で〝ウブ〟ではないと思いますが、とにかく一つの情報として気軽にお読み下さい。

◎〝マルセル・オム教授の不思議な発見物〟は少々古い事件ですが、アダムスキー問題と重要な関連をなすもので、発表が遅きにすぎた感があります。しかしUFO研究界で一時大問題になったことは事実ですから、その意味で価値はあると思います。

◎新訳〝空飛ぶ円盤実見記〟は第二章が終わって、次号で第三章〝十二月十三日の再来〟となり、この章で例の金星文字が出てきます。オム教授の記事と掲載号が一致しなかったのは惜しいことですが、なにぶん頁数が少ないためにうまくゆきません。

アダムスキーの著書中でこの〝空飛ぶ円盤実見記〟はすでに古い物語となってしまい、会員の方々にはあまり感興がわかないかもしれませんが、ノンフィクション・コンタクトストーリーの代表的古典として永遠に残るものであろうと思います。K社版の〝実見記〟の訳がズサンであったことと訳書の装丁がよくなかったために、初期においていかがわしい書物であるかの如き印象を一般読者に与えたのは残念でした。本誌連載の新訳〝実見記〟は完訳とし、原文に忠実な直訳体にしてありますから、K社版とは異なった雰囲気と新鮮な印象を受けられることと思います。連載完了後は立派な装丁のもとに単行本として刊行の予定です。

◎カナダ、トロント在の宮内温夫君から四月七日付で来た便りによりますと、モントリオールのムース・ギャラリーで個展を開いたところ大好評を博し、ギャゼット紙、CBC放送が賛辞を呈したということです。移民ビザがおりたので五月頃にはニューヨークへトライしてみるつもりとのこと。ご成功を祈るや切。会員の皆様によろしくとのことでした。

◎同じくカナダ、オタワ在の会員森山征夫君からはエーリッヒ・フォン・デニケンの著書〝神々の戦車〟（英語版）が贈られてきました。厚く感謝仕ります。デニケンはスイスの考古学者で特に古代のUFO関係遺跡を研究して名声を博しており、この著書はその研究成果をまとめたものです。まだ邦訳版は出ていないと思いますので、いずれ内容を本誌で紹介します。宮内君と森山君は時々会っているらしく、古山君も元気でいるとの由。

◎右のデニケンの名著の一つである〝星々へ帰る〟（英語版）が最近スイスGAPリーダー、ルウ・ツィンシュタリック女史から贈られてきました。これは〝神々の戦車〟の姉妹編で、貴重な資料となるものです。彼女はデニケンと友人であるらしく、非常にすぐれた考古学者だと述べています。

◎その他国内外の同志から多大のご援助をいただいておりながら紙面の都合でその全部をここに載せきれないことを申訳なく存じますものの、ご厚意には心から感謝しております。

◎本号は四月末に刊行の予定でしたが、種々の事情により大幅に遅れてしまいました。大体編者のタイプ打ち版下製作の時間は主として土・日くらいしか取れず、無理からぬ点もあります。弁解がましくて心苦しい次第ですが、よろしくご了承下さい。編者の和文タイプライター打ちの技術は相当なものだと印刷所からおほめの言葉を頂戴しました。ほめられるということはいいものですなア。勤務先では英文タイプを打ち続け、自宅では和文タイプを駆使するというふうにやっていますが、これらの機械が私には生きものにしか見えません。

◎和文タイプ打ちの期間中は郵便物の処理が遅れがちとなりますが、これは一度タイプを打ち始めたら一定のケジメのつく個所まで勢いに乗って続けないとだめなのであって、途中で他の仕事に変えると調子が狂うという事情によります。ご了解のほどを。

◎日本GAPは、別掲広告のとおり、毎月東京と大阪で研究会を開催しており、スライド映写も実施しております。定期的にUFOの貴重な資料をスライドで公開しているのは日本GAPだけですから、希少価値はあるものと思います。ふるってご参加下さい。

◎本誌発行は遅れがちですが、資金さえあれば確実に刊行するよう努力します。よって資金確保が最大のポイントですから会費納入を遅滞なくお願いいたしますとともに、御寄付は心から歓迎いたします。

（K）

May/1971

Kosmos（コスモス）46

編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP

東京都江戸川区篠崎六—二三一

振替　東京三五九一一二（久保田八郎個人名義）

頒価二〇〇円・送料三五円